



In the Lie



伽藍

東雲 夜宵 - Yayoi Shinonome -

暁刻 - Akatoki -

皇城 輝羅 - Akira Sumeragi -

桜月 愛 - Kana Hanazuki -

橘 千歳 - Chidose Tachibana -

陸守 葵 - Aoi Kugami -

一色 - Issiki -

二極 - Nikiwame -

三角 - Mitsukado -

四季 - Yotsuki -

五行 - Gogyo -

六道 - Rikudo -

七宝 - Shippo -

八戒 - Hakkai -

九鬼 - Kukami -

人は嘘を吐く。

その中に含まれるのは、善意だったり、悪意だったりする。人を慕い、厭い、想い、嫌い、祝い、呪いながら、人は偽りを口にする。

それを、俺は知っていた。幼い頃から。

眼下を見下ろす。足の下に、陸守の町が広がっていた。

比喩ではなく、真下——だ。足場は無い。何を支えにする事もなく、この体は中空に浮いている。この高さからだと、人は米粒よりも小さく見える。

そんなものなのかも知れないと思う。人は米粒以下の存在だ。俯瞰した、この——飾り立てられた墓場のような——光景こそが、本質なのだ。そう考えた方が、きっと潔い。

誰も自分を見付ける者などいないだろう。上というのは人間の死角だ。人は常に、下ばかり向いている。

幾つかの小学校。中学校。高校は私立と公立が一つずつ。この町の大体の高校生が、この公立高校に通っている。何を考える事もなく。

町の端には低い山があり、その頂上近くに陸守神社があった。この辺りでは最も大きい神社だ。今年の元旦にも、初詣の客が多く詰め掛けていた。

そんな事を一つ一つ思い出しながら、俺は町を見下ろしている。

家に帰る気にはならなかった。暫くはこのままでいようと決めて、視線を少しだけ上げる。

月が、浮いていた。

満月。

何の気無しに、それを眺める。沈み掛けの月の色は、濃い。常に人間は、この姿に幻想を抱きながら生きてきた。

色の波長によって簡単に説明出来て仕舞う事象の一つにすら意味を見出すとは、随分とご苦労な事だ——そう思って、途中で思考を止めた。

生きているなぞ、皆『ご苦労な事』をしている。

もう一度視線を戻した。見下ろした時に真っ先に浮かぶのは、高い、という印象ではなく遠いという感想だ。だが、丁度良い。

自分には、このくらいの遠さが合っている。

景色を見ながら考える。通行人は少ない。時間が時間だから、当然だろう。そう、この眼に見える範囲で生活している人間の中に、嘘を吐いた事の無い者は存在するのだろうか。

思わず笑った。

嘘を吐いた事の無い人間なぞ、いる訳が無い。

安堵した自分に、思わず嗤ったのだ。

『————様』

呼び掛けられて、俺は視線を滑らせた。近くに気配は無い。声だけを届けて来たのだろう。そう判断して、答える。

「……何だよ？」

『近くに、吸血鬼が“発生”した模様です』

「ああ……」

そんな事か。

息を吐く。鼓膜を震わせた声は、男のものとしては高過ぎ、女のものとしては低過ぎる。耳に心地の良い声。

「放っとけ」

『御意』

丁重な返事を最後に、声は聞こえなくなる。六道。《九鬼》の鬼。

吸血鬼の“発生”なぞ久し振りだった。彼等は、“覚醒”——完全に力を己のものとするまでに、凡そ一箇月程掛かる。闇の貴族。異形の中でも最高峰の力を持つといっても過言ではない存在。確かに脳裏に留めて置いた方が良い情報なのかも知れない。《九鬼》の名を持つ俺は。

だが、と——思う。正直に言えば、興味が無かった。

いつもの事だ。そう思う。大体、非力な雛では一箇月生き残れるとも思えない。

息を吐く。この一瞬で、どれ程の存在が動いた？

全ての命は死んでいる。

全ての命は生まれている。

全ての命は流れている。

何の変化も、相変わらず起こらない。

例外はあるか？ 答えは否だ。考える必要すら無い。この世界で、頭を使わなければならない事柄はどの程度あるのだろう。

緩やかに思考は停止する。停止して、元の位置に戻る。

人は嘘を吐く。

人は存在し始めたその瞬間から嘘吐きだ。産まれたという嘘を吐く。生きているという嘘を吐く。

一切の例外はあり得ない。

いつの間にか、月は完全に沈んでいた。西から陽が昇る。一日の始まりだ。

———今日も、朝焼けが来る。

一瞬。

体が浮遊する。その錯覚。意識が引き上げられる、その感覚。

毎朝感じるそれが、私は嫌いだ。見たくもない現実を見せる檻。

だからと言って、夢が惜しいという事は、無い。私は基本的に夢を見ない。もしかしたら、覚えていないだけかも知れないが。

不快感と嘔吐感に顔を嚙めて、私は体を起こした。息を吐き出して、ベッドから立ち上がる。

淡い色のカーテン——これは私の趣味ではなく、この家の主が用意したものだ——を引くと、鈍い光が部屋に入る。空を見上げる。

「……曇りか」

雨でなかっただけ、マシだろう。晴れたのは幾日前だったか。梅雨に入ってからというもの、青空を見る回数が格段に減っている。

晴れだったからといって、何が変わる訳でもないが。

起きて、至極寝起きの悪い同居人を起こす。私の一日は、そこから始まる。私が、この——皇城の——家に引き取られてから、何も変わる事のない日常だ。

親の顔は、遠い時間の向こうに霞んでいる。気付かぬ内に、随分と時間が経って仕舞った。

同居人——というよりも、居候先の息子。私と同年の少年。名は、皇城輝羅。彼の部屋は、私の隣だ。

戸籍上では、私はこの家と何の関係も無い。親族ですらない。親の親友だったらしい、とは人から聞いた話だった。

「輝羅、入るぞ」

軽く言葉を掛ける。無論、この程度で彼が眼を覚ます筈も無い。向かいのベッドで暢気に寝ているのは、整った顔立ちをした少年だった。

「起きろ」

朝だ。声を掛けてみる。何の反応も無い。予想済みだ。

「輝羅、輝羅！」

面倒臭いが、今この家には輝羅と私しかいないのだ。私が起こさなければ、この男は間違い無く遅刻する。別に構わないのだが、それは私に輝羅の世話を任せて海外に行った輝羅の両親に申し訳無い。そのような訳で、耳元で大声を出してみる。

ベッドに引き摺り込まれかけた。腹筋に肘を打ち込んで逃げ出す。この時点で普通なら起きる。

暢気に寝息なんぞ立てている少年の口と鼻を塞ぎたくなる衝動を堪えながら、私は用意してきた武器を使用した。

即ち、氷水。

「———冷た……!?!」

顔などという優しい事はせず布団を捲って胸の上に掛けてやる。布団で温まっていたのだから、それなりの衝撃だろう。案の定飛び起きた少年に向かって、極上の笑みを向けた。

「お早う、輝羅」

「夜宵！」

残念ながら、その程度の怒りで動じてやる程可愛い性格はしていなかった。毎朝毎朝学習しない方が悪い。眼を開けて睨んで来る輝羅を見下ろす。

寝ている時に綺麗だった顔は、矢張り起きている時も綺麗だった。しかし、彼を見た時に真っ先に眼を奪われるのは、その藍色の瞳だろう。私は密やかにそう思っている。

異国の血でも混ざっているのかも知れなかったが、問うてみた事はない。そう言えば、彼の父親が若干日本人離れした顔立ちをしていた気もする。それ程興味のある事柄でも無かったのだが。

「用意をして来い」

その間に、私はいつも朝食を作る。そうは言っても、トーストを焼くだけだ。そんな簡単な作業すらしようとしないこの男は、放って置くと三食抜いて平然としているのだ。

バターと牛乳を準備し終わった時に、丁度輝羅が出て来る。まだ不機嫌そうな顔をしていたが、これもいつも通りの事なので、気にせず食べさせた。私は君の親ではないのだが？

家を出るのは、私の方が若干早い。同じ高校に通っているが、寄る所があるからだ。

玄関にある鏡で、制服姿の自分をちらりと確認する。本当に一瞬見る程度だ。私は己の顔が好きではない。

「待て、夜宵」

「……うん？」

呼ばれて振り返ると、輝羅が立っていた。手を伸ばした、と思ったら、ネクタイを直して離れていく。

その寸前に軽く髪を撫で付けられて、寝癖でも残っていたのかと首を傾げた。

「有り難う」

「お早う」

「————」

反応が遅れて、ああそう言えばまだ挨拶を返されていなかった、と思い出した。順序が可笑しい。小さく笑い、頷いて見せる。輝羅はそれで満足したようだった。

「では、後で」

「気を付けろよ」

何に気を付けろと言うのだから。

互いに出掛けて、しかも学校で再び顔を合わせるのだから見送りの言葉を口にするのも不自然だろう。そんな思いから、毎朝の遣り取りはいつも中途半端なものになっている。

私が完全に家を離れるまで、彼が視線を外さないのも毎日の事だった。いつ転ぶか判らない、とでも思っているのかも知れない。事故で亡くなった両親を前に、訳も判らずに泣き喚いていたのは、もう随分と昔の話なのだが。

あちこちにある紫陽花に視線を向けながら歩く。色は皆、若干ずつ違っている。

私は毎朝、駅に寄っている。学校は町内で、歩いて行ける距離にある。駅に行くのは、町外か

ら通っている友人を迎えに行く為だ。

大きくはない時計台。大体彼女はそこにいるのだが、さてどこに行ったかと視線を走らせた。時間的に、既に来ている筈だ。

そんな事をしていた自分は、恐らくとんでもなく無防備だったのだろう。横合いから飛び付いて来た小柄な体に、危うく押し倒される所だった。

「おっはよおう！」

素っ頓狂な挨拶とともに抱き付いて来る少女。驚きは一瞬だ。

「お早う」

「うん、今日も希望に満ち満ちた清々しくて綺羅綺羅しい朝だね！」

「嘘」

ダウト。きょとんとした顔。

「そんな事思っていないだろう、愛——？」

桜月愛は、薄らと微笑んだ。

俺の朝は早い。

少なくとも始業の三十分前には、自分の席に着いて教科書を広げている。今日の範囲。昨日の範囲。家でもやった予習と復習を、ざっともう一度確認しておく。

「橘！」

呼ばれて、顔を上げた。眼の前にはクラスメイト。面倒だという思いを隠すのも億劫で、眉を顰める。

「ンだよ？」

「英語見してくんね？ お願い！」

同じ男に上目遣いで見られても、嬉しくもなんともない。断るにもしつこそうだったので貸してやった。大袈裟な程に喜ばれて、溜め息を吐く。

「よっしゃあ！ 流石橘大明神様！ 恩に着るぜ！」

別に着なくても全く構わないし、大体三分後にはその恩を忘れているに決まっているのだ。そうやってやるのも面倒臭くなった。

もう一度教科書に視線を落とす。現代文。どこまでやったか、ちょっと判らなくなった。今日はあまり集中力が持続しないらしい。

舌打ちし、諦めて思考を放棄した。早めにクラスメイト達の会話に加わろうかと思う。少なくとも始業数分前はそうするようにしている。円滑な人間関係も大切なものだろう。

自分にとっても、自分の周囲にとっても。

「昨日のドラマ観たか？」

「.....何かやってたっけ？」

さっぱり記憶が無い。大体ドラマを放映する時間には勉強している事が殆どだ。

「阿呆かああ！ 何でだよ、何でそうなんだお前は！」

「『好きなテレビはニュース』だもんな、橘は」

横合いからからかわれて、むっとして言い返した。

「何だ、何か悪い事でも？」

「くそう、これだから良い子ちゃんは！」

この年頃の人間は、どいつもこいつも動きがオーバーだ。すぐ隣で盛大に悶絶されて、少し引いた。

「おい、ドン引きされてるぞお前」

「何い!? 俺とお前の間にはそんな薄っぺらい友情しか無かったのか！」

薄っぺらいも何も、近頃の子供ってのはそんなもんなんじゃないのか。返そうとして、止めた。何もかも面倒だ。

「ま、所詮学年二位様は俺達とは違う頭をお持ちだって事だな」

揶揄する声には、その台詞程の険は含まれていなかった。その程度には、俺はこのクラスに馴染む事に成功している。

「そんな事言ったらお前、一位様はどうなんだよおお」

情けない声は、机にへばり付いた男から漏れたものだ。先程自分が引く破目になった原因で

ある。

「ああ、そろそろ――ほら、来たぜ、一位サマが」

一位サマ。

その言葉に、思わず反応して仕舞う。幸い、気付いた者はいないようだったが。

「ちいっす、皇城」

「ああ、お早う」

俺達の中に、するりと入り込んで来た。その男は、始業の五分前に毎日到着する。

整った顔立ちに穏やかな笑みを乗せて、それが嫌味にならないのが皇城の魅力なんだよなあ、と体をくねくねさせながら気持ち悪い事を言っていたのは誰だったか。

「どうした、橘？」

「あ、いや……」

黙り込んだ俺に気付いたのか、案ずるように覗き込んで来る男。

皇城輝羅。学年一位。当然クラス順位も一位だ。多数の運動部から熱烈なラブコールを受ける程の運動神経の持ち主。整い過ぎた顔立ちに、珍しい藍色の瞳。

当然、女子からはしょっちゅう告白されている。一度も誰かと付き合った事は無いらしいが。かと言って泣かせる事もなく、上手く宥めて事を収めるらしい。らしい、というのは、それが人伝に聞いた話だからだ。

実際、彼は優しい。他人を泣かせる事など思いも寄らないだろう。男子にも女子にも人気があり、その品行方正な態度は教師にも高く評価されている。

要するに、過ぎる程に出来る男。欠点が無い所が欠点のようなクラスメイトだ。

皇城に自分が複雑な思いを抱えている事は、本人は勿論誰にも知られていない。努力など知らない、涼しい顔で、あっさりと自分の努力を超えていく男。恐らくは、己が誰かを踏み躪っている事にすら気付いていないだろう少年。

「何でもねえよ」

眼の前にある端正な顔に舌打ちしそうになるが、それを堪えて俺は笑った。皇城との仲を壊す事は、このクラスで生活していく上でマイナスにしかならない。

「そっか」

ほっとしたように笑う顔。罪悪感よりも、嫌悪感が先に立つ。

「もうすぐテストだろ？ 調子はどうよ？」

その話題を今出すな。そう言う訳にもいかず、口を開いたクラスメイトに視線を送る。皇城は苦笑していた。

「ああ、どうだろうな……」

「お、何々？ もしかして首位転落かあ？」

「じゃあ、俺が一位かな」

冗談交じりに、俺は言った。皇城が悪戯っぽく笑う。

「負けないぜ？」

「どうだか」

そんな事判ってる。返しそうになって、慌てて取り繕った。どうあっても、自分はこの男に敵

わない。

始業のチャイムが鳴って、それぞれが席に着く。その直前に、俺は皇城に囁いた。

「なあなあ、東雲さんは――」

「ん？ ああ、相変わらず」

男なんて出来てないよ。その言葉に安堵する。男自体に興味が無いのかも知れないが、振り向かせる努力はしてみる心算だ。

東雲夜宵。俺の片想いの相手。昔から皇城の家に居候して、彼とは半ば兄妹のような関係らしい。皇城と東雲さんは、色恋めいた関係には程遠いし互いにそんなものは望んでいない。それは知っている。

だが、それでも不安になる事はあるのだ。自分よりも東雲さんに近い位置にいる男。その前提が、俺から皇城への感情を更に鬱屈させている。

そんな事は知らない教師が、教壇に立っていつまでも席に座らないこちらに視線を向けてくる。何か言われる前にと、席に戻った。

今日も変わらぬ一日が始まる。

そう、もしも。

例えばそれが悪意だったとして。

世界は赤によって構成されている。

邪魔だ。私は何度思ったか知れない感想を抱いて眉を寄せた。

自分ではそんなに気にしていないのだが、私は背が低い。当然、座高も低い。眼の前に背の高い男なぞが座っていれば、考えるまでもなく黒板は見辛くなる。

別に無意味な黒板も不景気な教師の顔も見る必要の無いものである事は確かだが、親愛なる私の親友殿がノートは書いておけと煩いのだ。そんな事をせずともテストは適当に出来るものなのだが。

自分自身だって必要としていない割には、妙な所で生真面目だ。現に私は、彼女が七十点以下を取ったのを見た事が無かった。いや、私自身もそんな低い点数は取ったりしないが。或いは親友殿の場合は、擬似兄が勉強を教えているのかも知れない。あの男は確か学年一位だと聞いた事がある。

諦めて、ノートも教科書も閉じる事にした。後で夜宵に見せて貰おう。

この席は窓が遠いのが難点だ。それでも、重い空は眺める事が出来る。今日は降らないだろうが、明日以降はどうなるか判らない。

外が明るくないからだろう、窓には教室の全景が映っていた。黒板、教師、教壇、机、椅子、生徒、鞆、ロッカー。その中にうとうととしている親友殿を見付けて嬉しくなる。彼女は大概の場合に無防備だが、眠い時は更に無防備だった。いや、毎日遅くまで読書をしている所為で眠そうな顔をしていない日の方が少ないが。私も読書量は多い方だ。

自然と眼に入りそうになる自分の姿は見ない。窓を通していても、教室は何も変わらない。

学校というものは概ね何処も似ている。私はそう思う。

古くても新しくても、広くても狭くても、大きくても小さくても。等しく社会を構成して正しく世界を拒絶した子供を抱えている。

学校の教室に共通の、一種独特の倦怠感とも呼ぶべきものに身を委ねて、私は今日も授業を受けている。子供が学校に求めているのは、知識ではなく学歴だ。否、子供ではなく子供の親と言った方が正確だろうか。どちらにせよ、話を真面目に聞いているものが何人いるのだろうか。

子供が学校に求めるものがあるとすれば。それは、そう一一変化ではなく、きっと、真逆の安寧だろう。私はそう考えている。

例に漏れず、私は話を聞き流している。外の景色は変わらない。内の景色も変わらない。両方の様子を同時に眺めながら、私は益体も無い事を考えている。そんな事をしていれば、当然眠くなるに決まっていた。

「アイちゃん」

「！」

一瞬一否、暫くは意識が飛んでいたのだろう。前触れも無く呼ばれて――『アイちゃん』は私の愛称らしい――、私は跳ね起きた。話し掛けた相手が、可笑しそうに笑う。

「すごい寝てたねえ？ 挨拶にも反応しなかったよ？」

「……ありゃりゃ。寝ちゃったにゃあ」

本当に気付かなかった。チャイムにすら反応出来なかったとは不覚である。

自分は座っていて、相手は立っている。当然、見上げる形になった。

「お早う、アイちゃん」

「おはよお」

今更聞こえなかったフリは出来なかったので、普段通りに返した。私がある程度の人間と友好的関係を築いているのは、単純に我が親友殿の為だった。彼女が困った時に私の力でどうにもならなかった場合、手を借りられるように。

当然私の思惑など見透かしているであろう親友殿は、こちらに視線を向ける事もなく窓を見ていた。相変わらず、窓には二重の世界が映し出されている。

彼女は何を見ているのだろう。思ったのはそんな事だ。

ちらちらと視界を遮る赤。それに気付かないフリをして、私は今日も生活している。

「次、英語でしょ？ 予習して来た？」

する訳が無い。

「……うわあ。カナ忘れたよ」

「やっぱり？ 忘れっぽいなあ」

呆れたように笑った少女が、何がそんなに楽しいのか笑みを浮かべながらノートを持ち出して来た。誰かを世話する事によって得られる自己陶醉と、若干の優越感。彼女が求めているのはそれだろう。私は、クラスメイトの間でマスコットキャラのように扱われている。

それに文句があろう筈もない。概ね皆、私には甘い事を知っている。

赤が煩い。逃れるように視線を窓に向けて、胸に浮かんだのは後悔だった。

自分の顔が見える。自分が映っている。自分と眼が合っている。『桜』と書いて『はな』と読み、『愛』と書いて『かな』と読む――名前の通りに偏屈な自分。その自分の内面を表したかのような顔。

「判る？」

「うん？」

判るに決まっているが、私は首を傾げるに止めた。程々に頭が悪い方が、下手に出来るよりも印象は良いだろう。

彼女の説明を聞きながら、意識の全ては親友殿に向かっている。東雲夜宵。綺麗な顔と心を持つ少女。私の唯一。いつだってたった一人、自分を見抜いてくれる人。この赤い世界の色彩。

世界は赤に遮られている。

赤が人の悪意の色だと、知ったのはいつの頃だっただろう。錯綜する赤。赤。赤。人間とはそんなものだ。

只管に、滑稽。

嗚呼、今日もこの命に意味は無い。その素晴らしさに、私は少しか微笑んだ。

皇城輝羅と東雲夜宵は擬似兄妹。それが、周囲と、そして夜宵の認識だった。

俺もそれを否定しない。否定していない。そして肯定もしないままに、内心で毒吐く。

――ざけんじゃねえ。

口に出しそうになったが、俺は無言で微笑するに止めた。『皇城輝羅』は、そんな言葉遣いをしない。

「そうかな？」

「ぜってえそうだって！ あの女超怖い！」

「んな訳あるか！ 皇城も何か言え！」

言え、って……何を。言ったら言ったで、お前は苦々しげな顔をするんだろう、橘？

そんな事を思って、俺はちらりと、横目で橘を見た。橘千歳。一年の時から同じクラスの男。顔は平均より上。成績は学年二位。運動は若干苦手。性格は際立って変わったものではないが、少々神経質気味。

そして、夜宵の事が好きな要注意人物。

周囲から目すれば、俺達は親友という間柄……らしい。無論俺はそんな事思っていないし、相手が俺に対して一方的な敵愾心を抱いているのも知っている。

そしてそれを橘が、隠そうとしているのも。

「夜宵は優しいよ」

「はあん、相変わらずのシスコンぶりで、オニーサマ？」

誰がお兄様だ。低く呻きたくなるが、苦笑に止める。

「あんな恐え女と十年一緒だなんて俺にや無理だね！ 絶対！」

「お前、趣味悪いよ」

鋒先を向けられた橘が、眉を跳ね上げた。その態度が一層クラスメイトを煽るのだと、彼は判っていない。

「東雲さんは可愛いよ！」

「何で東雲夜宵なんて好きなのかなあ、橘くんは」

そう、そうだ。この会話になった原因。橘千歳の、片想いの相手。

「無口だし無表情だし、正直何考えてるか判んねえ」

ま、確かに顔は好みだケド？ そう嘯いた男の顔と名を、俺は確りと記憶した。

「そんな事無いって」

「へいへい、擬似兄は黙ってろって」

イモウトが他の男に取られそうで心配なのは判りますとも！

さり気無く口を挟んだ言葉は聞き流される。橘は悔しそうにしているが、周囲の男達のこの反応は俺にしてみれば寧ろ願ったり叶ったりな状況だと言え、こいつは果たしてどうするのだろうか。

ひっそりと、気付かれぬように、嗤った。

「いい加減にしろよ」

潮時だろう。そう思って、怒った表情を作ってみせる。案の定ふざけていたクラスメイトは軽

く肩を竦めたり笑ったりして、別の話題に移っていった。橘が口を挟む隙も無い。

適度に喜んで怒って楽しんで、ふざけて笑う。ポーカーフェイスとはそんなものだろうと、俺は理解している。現に今も、俺の考えている事を察した者など誰もいないのだ。

夜宵もあまり心の内を他人に見せる事は無いが、別段彼女は隠している訳ではない。単に、億劫がっているだけだ。そして、彼女は理解を求めている。

級友達のこの評価も、そういう意味では自業自得なのだろう。しかし俺は案外あいつの懐が深い事を知っているし、可愛いものが好きな事も知っているし、困っている奴を放って置けない人間だということも知っている。そしてそれ等はこの少年達には知られなくて良い事だと思っている。

橘については、完全に俺の過失だった。一年の頃から何故か一緒にいて周囲に親友と認識されていて、だから夜宵が警戒を解くのも早かった。

知れば、墮ちる。

そんな事は、俺が一番判っている筈だったのに。

夜宵は、理解出来る者にだけ理解されれば良いと、そう考えている。だからこそ、彼女が本当の意味で孤独にはならないのだという事も。

自分が孤独だという事に気付いていないその他大勢を知っているから、俺は安心出来た。夜宵は決して俺に依存しない。確固たる一人の人間だった。自分の、あの少女に対する執着を知っているから、手を取らずに歩いて行ける現状に安堵した。

橘をちらと見遣る。視線に気付いたのだろう、不審げに見られたが、曖昧に笑うだけで誤魔化した。

皇城輝羅と東雲夜宵は擬似兄妹。それが、周囲と、そして夜宵の認識だった。

知っている。橘だってそう考えているだろう。だからこそ、俺を足掛かりにして夜宵に近付こうとしているのだ。そしてそれを、俺にも誰にも隠していない。

しかし、とても——そう、とても——残念な事に、俺には夜宵を橘に渡してやる気など更々無かった。俺はあいつを放せなくなる事を恐れている。しかし、それ以前に他に渡すなど論外な話で。

周囲と、そして夜宵が考えている関係は、実際の所現実とは大きな隔たりがあった。それを知っているのは、俺と、あと一人。いや、あの夜宵の親友とやらも気付いているのかも知れなかった。あの女は案外油断ならない。

「——ま、頑張れよ」

「皇城い……！」

ぽんと肩を叩くと、橘に恨めし気な眼で睨み上げられた。クラスメイトとの会話に戻りながら、俺は思う。

自分が夜宵の事を好きなのだと知ったら、彼はどんな顔をするのだろう。

すう、と鼻から息を吸い込む。

湿った土の匂い。

腐った錆の匂い。

私がいつもそのように評するこれは、単に空気中に微量に混ざる酸の匂いだ。

雨が近い。直感して、私は息を吐いた。頭の中では、先程までの愛との会話を思い出している

。

——カナはねえ、大袈裟な物語が嫌いなんだよ

普段と同じように、虚構とそれ以外の何かの入り混じった言葉を、彼女は意味も無く吐き出し続ける。

——例えば、『残り時間で世界滅亡！』みたいな？ まあそんな感じのトンデモ話ね！
世界を巻き込むなよって感じだよおう

最近そういうの多いよね。くすくすと悪意の欠片も無い——そう、あれは嘘の——表情で笑う彼女に、私は頷いて見せた。そう、確かに最近はそういうものが多い。ドラマ。映画。小説。漫画でも。

恐らくそれは、誰でも一度は望んだ事であるからだ。全ての人間は、常に何かが起こる事を期待している。期待して、そして、その期待は常に裏切られ続けている。

あの時あの言葉を口にした愛は、恐らくその意味をよくよく理解しているのだろうが。

街灯が道を照らしている。外はとうに暗くなっていた。雲が空を覆う中で、月の光が届く筈もなく。ひたひたと音がしそうな静寂と共に、陰影が視線を向ける全てに息衝いている。

学校帰りにカフェに寄ったら、思いの外時間が経過していた。食事の時間も過ぎている。輝羅は、放って置いたらそのまま餓死していても不思議ではない男だ。一日三食が何よりの基本だと、私は考えている。

——多分ね、人ってのは何人かの犠牲じゃあ満足しないんだよおねえ。にゃあ。何十人、何百人、或いは何千人、とかさ

途中で無意味に入った鳴き声まで脳内で反芻した。口調が若干安定しないのも、愛の特徴だ。情緒不安定という訳ではないのだろう。そもそも彼女に安定は必要無い。

学校のある日は、彼女は背中までの黒髪を頭の天辺に近い位置で纏めている。ひょこひょこ揺れる髪をクラスメイトに引っ張られるのを何度も見ていた。友人達からのそれは気安さの表現の一種だと私は考えている。愛自身がどんな感想を抱いているかは定かではない。サムライー、などと彼女はふざけて言っているが、実際もう少し長ければそれで納得出来るかも知れない。

——何でか判るかによ？ 夜宵！

私は今現在、少々急いでいた。若干早足になっていたのを緩めて、その時に考えた事を思い返してみる。

現実味が無いからではないか、と私は答えたのだった。少数は多数に紛れる。何千人と——或いは何万人、何億人が——死ねば、一人死んでも桁を変える事すら出来ない。現実味が無い。純粹なるフィクションとして楽しめる。

街灯は途切れ途切れに、それでも続いている。それを辿るように、私は足を進めた。公園を通り過ぎる。学校から駅までの間に私の——正確には皇城の——家はあるが、寄ったカフェには態々遠回りをして行ったのだ。普通に学校から帰るよりも、若干遠い。

大概、私と愛で会話をしている場合は、相手が一方的に喋っている事が多い。私はそもそも普段愛以外の人間と話す事自体少ないし、話題とてそう多い訳ではない。こうなるのは当然と言えた。

だが、私は知っている。その愛自身、他人との間に会話を必要とする人種ではない。

——あのねあのね、知ってるからなんだな！ 人は

ふつり、と。

会話が途切れた。否、言葉が途切れた。私達の間では、珍しい事ではない。

彼女は時々、不意に飽きたようにふつりと押し黙る。そして酷く詰まらなげな瞳で、世界を睥睨するのだ。

先程もそうだった。カフェの窓ガラスから見える、道を行き交う人々を、表情の削げ落ちた顔で眺めていた。

いつもいつも偽りに塗れている彼女が、己を曝け出す数少ない瞬間。その横顔が、私は好きだ。彼女の顔から嘘が消える瞬間。一切を見下した、拒否と拒絶の瞳。仮面を被っているかのように変わらない笑顔が、ぽとりと落ちた表情。

彼女は私にとって、一種の憧れなのだろうと思う。自分を厭い、他人を厭いながら中途半端に生きている私と、潔いとも言える態度で周囲を切り捨てている愛。

恐らく私はその時、その美しい横顔に見惚れていたのだろう。どちらも動かないままに、暫しの時間が経った。動き出すのも、矢張り愛から。

——一人の本能は知ってる。自分達が増え過ぎた事を

結局なるようにしかならないのに。諦めですらない表情でそう嘯いて、彼女は心ふと実に上機嫌に笑った。嘘だらけの言葉に、それでも私は満足している。

——私が好きなのはね、小さな物語なんだよ。下らない、些細な言い争いか、そこらの喧嘩と同レベルの話が好きなのだ！

何故かと、問うた筈だ。愛は笑った。

——世界の為になんて、人は死なないよ

私は驚いた。あの時の衝撃は、今も胸に残っている。ここ半年で一番驚いたかも知れない。

彼女があれ程に前向きで建設的な意見を言うなどと、誰が予想出来ようか。

私はその時、愛の顔を見た。その表情は嘘だと告げていた。それで、漸く安堵出来た程だった。しかし確かに、偽り以外もあったのだ。だから私は、その言葉をどう受け取るべきか考えあぐねている。

私には嘘と偽りが判る。正確に言えば、嘘と偽り以外は判らない。

世界は嘘に塗れている。赤に塗れている彼女の世界と同じに。

愛の言葉は常に正しく、正し過ぎて誰にも受け入れられぬ類のものだ。そしてその全ては嘘に限りなく近い。とても、とても。だから、意味が無い。彼女の言葉は、虚偽が多過ぎて虚構が少な過ぎて、人の心に届かない。

この世界に真実誰かの為に動ける人間がいたとしよう。だとしたらその人間は、単なる欠陥だ。事故だ。矛盾だ。過失だ。間違い以外ではあり得ない。

私は再び足を速めていた。家では恐らく輝羅は本を読んでいる。私も私の友人も読書量は多いが、擬似兄は活字中毒と言って差し支えない。何も言わないでいると食べる事も寝る事も忘れるだろう。そして恐らく、翌日学校に行く事も忘れるに違いない。

三大欲求よりも知識欲が勝っている割には寝汚いとは何事だ。あの男は全ての才能の代わりに人格と生活能力が崩壊を起こしている。私の身の周りには人格が歪んでいない人間の方が少ない。擬似兄と親友はその筆頭だろう。

詮無い事を考えている間に、大分時間が経っていたらしい。本格的に急いだ方が良かったかと私は駆け足になり——それとほぼ同時に、今度は急停止する破目になった。

「飛び出すなよ、お嬢」

言ってから、はたと気付く。雌とは限らない。

横合いから飛び出して来たのは、小さな黒猫だった。まだ仔猫だろう。毛並みが良いから、飼い猫だろうかと考える。首輪は見えない。

自分を蹴り飛ばしそうになった人間に驚いたのか、眼を丸くしてこちらを見ている。視線が交差する。すぐに逸らしかけて——止まった。

——一瞬？

赤。鮮やかで淡い赤だ。夕焼けには薄い、喩えるならば朝焼けの、そう、夜明けの空のような

。

「俺は『お嬢』じゃないぜ？」

「そうか、それは失礼した」

すっ呆けた答えを返してから、瞬く。

猫が、.....喋った？

ドリンクバーとは実に便利な仕組みだ。俺、陸守葵はそう考えている。

例えば女子高生などは、このドリンクバーのお陰で何時間も平然と同じ席に居座る事が容易に出来るのだ。食事が即席物のような味であろうと、店員の対応が杜撰であろうと、ある程度まではこれで我満する事が出来る。

こういう場合は店のオリジナルの飲み物は選ばない方が良く。当たりが少ないからだ。既製品で自分の好きなものを選ぶ方が余程利口だろう。

だが、と。その一方でこうも考える。こういう場合だからこそ、普段飲まないものに挑戦してみるのも一つの手ではなかろうか。紅茶やコーヒーなどは、飲めない人間が地味に多い事だし。

しかしすぐに、俺はその考えを否定する。どちらも淹れたての方が良い。特にコーヒーは最悪だ。香り云々以前に明らかな酸味を感じる時があるのだ。これは缶コーヒーと同じくらい、俺にとっては許せない飲み物だった。

眼の前の少年が、口を開いた。

「おい、聞いてんのか、葵？」

否、違う。ずっと喋り続けていたのだ。俺が認識をしていなかっただけで。

それを証明するように、眼の前の少年、皇城輝羅が紅茶で唇を湿らせた。次いで眉を顰める。そんなに嫌そうな顔をするなら、最初からもっと無難な飲み物にすれば良かったのに。

ピーチティー。微妙だ。激しく微妙だ。そもそも俺は、所謂フレーバーティーというものが好きではない。寧ろ親の仇のようにも思えてくる。

そんな俺の選んだものは、烏龍茶。……最早何も言うまい。

「何考えてんだ」

「親の仇の事かな」

俺がそう言うと、輝羅は不審なものを見る眼をした。つくづく礼儀を知らない男だ。

「生きてんだろ、親」

それとも、彼は笑う。

「神を殺した、人間の事でも考えていたってのか？」

「それで正解」

――に、しておくよ。

どうせ、こちらの下らない考えなど彼は興味を持たないだろう。極めて人間らしい人間なのだ、輝羅は。

バイトがあったのに。そう思って、溜め息を吐く。そもそもこの男と出会ったのは、一年近く前、彼が俺のバイト先に新人として入って来たからだった。

一箇月が経った頃、輝羅は辞めた。何がしたかったのか暫く判らなかったのだが、それが居候の少女への誕生日プレゼントの為と知った時には大笑いしたものだ。

今でも俺は、同じ場所で働いている。

「バイトがあったんだけどねえ、輝羅くん？」

「知らねえな」

「……………」

一応、俺は彼よりも幾つか年上だった筈なのだが。

出会ったのは、一年前。別れは、その暫く後。彼が俺の徒弟だと知ったのは、その更に後。何故か判らないが、それ以降交流が続いている。

皇城の一家は、事実上俺達の一族とは絶縁状態にある。だからこの会合も、家の事は関係が無い。

いっそ清々しいくらいに。

家の事ならば、諦められたのに。

「――で？」

溜め息。そう、これは未練の溜め息だ。バイト代への。

「態々『一時間後に来い』なんつって呼び出したのは、その為？」

「悪いか？」

悪い。

――などとは、欠片も思っていないのだ。どうせ、この男は。

烏龍茶を飲み終わって、残った氷が音を立てた。次に何を飲むかを考えながら、視界を巡らせる。

人間は適度に無関心で、それが居心地良い。

いっそ、いつだって一切の興味を示さなくなれば、世界は幾分か平和だろうに。

コーヒーは、却下。

紅茶も、却下。

いっそジュースにでもしようか。

眼の前の少年は、不機嫌を隠そうともしていない。

「お前の愛しい愛しい夜宵ちゃんが仔猫を飼い始めたって、何の問題があるんだよ？」

俺は仕方なくそう言った。猫。猫は厄介な生き物だ。しかし、彼女が飼うと言い始めたのなら、世話は夜宵ちゃんがするだろうし。そもそも輝羅は、大概において東雲夜宵という少女に従順だった。

彼女は、気付いていないのだろうが。

彼は、気付かせないのだろうが。

夜宵ちゃんとは、直接の面識は無い。相手はこちらを知らないだろう。しかし、俺は、輝羅からこれでもかという程少女の話を聞いている。

「……特には」

我侷な子供の答えは、珍しく歯切れが悪かった。

正解に辿り着いたような気がして、息を吐き出す。激しく脱力した。

「嫉妬か」

「るせ」

るせ。煩い。日本語は正しく使えと言おうとしたが、止めた。俺だって適当だ。こうして緩やかに、日本の文化は崩されていく。

そんな大層な問題でもない。

それにしても不機嫌だ。俺はそう思って、眼の前の相手を観察した。二杯目は、暫くお預けだ

。

東雲夜宵。皇城輝羅の擬似妹。ただ一人、そうは考えていない人間が、いる。

二人でいる場面を見ただけで見た事もあるし、写真を見せられた事もある。綺麗な顔立ちの少女だ
と思う。

作り物のような美しさ。一目で判る。

彼女は、世界の事を何も知らない。

知らず、判らず、見ようともせず、ただ、その幼さで怯えて恐がって拒絶している――ように
、見える。

案外この世は適当なのだという事実に、いつか彼女は気付くだろうか。

気付かなくても、輝羅にとっては好都合なのかも知れない。この少年が何を考えているのかは
、未だに判らなかつた。

「……ま、疎そうな娘では、あるよな」

眇めた眼で見られた。剣呑な視線だ。こういう時、彼は年相応の子供に戻る。

自分だって、そう何歳も変わらない。

小さく笑った。

「夜宵ちゃんに変な虫でも付いたか？」

「付きそうなんだよ」

忌々しげに唾棄する輝羅を、呆れて見遣る。この男を優しいなぞと称した奴は、眼が節穴だっ
たに違いない。そう思って、溜め息を吐いた。

この世には、ものが見えていない人間が多過ぎる。

雨は、降っては止み、また降って、地を乾かす暇を与える心算は無いらしかった。

雲の流れは、速い。この分では、夜になるまでには粗方流れるかも知れない。そう考えて、私は笑んだ。

特に晴れが好きという訳でもない。

小さい頃、ふと見上げた空で、雲が恐ろしい速さで流れていった様子を思い出す。そう、あの時は本当に驚いた。

いつだって、雲はゆっくりと流れていくものだと、そう信じ切っていた。そこには欠片の疑いも無かったのだ。

認識の大半は、そういった思い込みで成り立っている。

小さい頃の不思議は、既に不思議ではない。こうして人間は、退化を繰り返していく。

視界にちらちらと映る、赤。

既に意味は無い。

風が強い。そう、これだけ速く雲が流れているのだから、当たり前の話だ。下ろしたままの髪を、風が攫っていく。

学校では、常に髪を上げている。今、私のクラスメイトが私を見掛けても、気付かないのではあるまいか。そんな事を思う。その程度には、私は彼等の人生にとってどうでも良い人間である筈だからだ。

そうなる事を、私は望んでいる。

親友殿はまだか。いつもの待ち合わせ場所、いつもよりも遅い時間。格好は制服ではない。髪は下ろしている。人は少ない。

休日の駅前。少しだけ暇そうで、少しだけ浮き足立って、そして普段と全く変わらない事に気付いている人間は殆どいないのだ。

暫く止んでいた雨が、また降ってきた。小雨、否、もっと少ないだろう。

何と言うのだったか。そう考えて、私は首を傾げた。日本の文化は、既に忘れ去られて久しい。

矢張り、一番眼に入るのは紫陽花の花だろう。そう、菖蒲の花も確か今が見頃だった。

観に行こうか。夜宵と一緒に。

一際強い風が吹いた。

思わず眼を瞑って、開いて、雨滴の向こうに望んだ姿を認めて笑む。約束の時間を十分近く過ぎていた。急いで来たのだろう、息が乱れている。

気にしないでも良いのに。そう思う。彼女の為ならば、一晩でも二晩でも、立ち尽くしてられる。

雨が上がって、その瞬間には陽が差していた。本当に安定しない天気だ。恐らくは地面が完全に濡く前に、また降り出すのだろう。

「済まない、待ったか」

「ええっと、十分くらいかなあ」

本当はもう、一時間も前から待っていたのだけれど。

夜宵は瞬く。彼女は私の言葉が嘘である事を見抜いただろう。しかし実際にどれくらい待ったかは判らないのだ。

どうせ休日は暇だ。夜宵の他に、遊ぶような友人もいない。

否、私は客観的に見れば多いのかも知れなかった。実際、誘われる事も多い。ただ、自分で友人と認めているのは彼女一人なのであって。

それ以外には、必要無いのであって。

「行くか」

「うん！ カナお腹空いちゃったんだにゃあ」

今日は、新しく出来たレストランでランチを食べる約束だった。

「私が遅れたからな、奢るさ」

「だあめ！ 今日は私が奢るのお」

彼女の両親は他界している。居候先に甘え過ぎるのも良くないと、彼女は週に何回かバイトをしているのだ。

そんな夜宵に、払わせる気は無かった。

「だがー」

「問答無用！ 早い者勝ちだもんね！」

「何だ、それは……」

呆れた表情。愛すべき私の親友殿は、いつだって無防備だ。

先程からちらちらと向けられる視線。視界を遮る赤。彼女は気付いていない。気付く必要も無い。

こちらへ近付いて、声を掛けたそうにしている男が数人。忌々しくて舌打ちしそうになるのを、はしたないと堪えた。

雨はまだ降らない。

紫陽花の向こう、一見して厄介な少年達。私の視線を追った夜宵は、何を思ったのか、少しだけ笑った。

「綺麗だな」

「へ？ ーあ、ああ、うん」

不覚だった。何の事か一瞬判らず、素の反応しか返せなかった。それに気付いたのだろう、夜宵が笑みを深める。

「珍しい」

「からかっちゃ嫌だな、もおう！」

思うに、夜宵の同居人ーそう、皇城輝羅とか言ったかーは、彼女を過保護にし過ぎたのではあるまいか。

暢気に紫陽花の感想を述べる親友殿に苦笑する。

「私は、あまり花には詳しくないのだが」

「べっつに良いんだよん。名のある花など無いさ」

「そうーそう、だな」

儂い表情は、夜宵に似合う。そんな顔を、あの男達に見られているのが不愉快で、私は彼女の

腕を引いた。

「さ、行こ行こ！」

雨は降らない。怪訝に思っで見上げると、既に雲は流れた後だった。思ったよりも少なかったようだ。その内、地面は乾くだろう。

濡れたアスファルトは不自然で滑稽だ。当然だ、濡れて美しいものは、命あるものだけなのだから。

夜宵は死んでからも綺麗なのだろうが。

「機嫌が悪いな」

「うっそ！ ご機嫌さ！」

彼女は何も言わなかった。ただ、ダウトと、唇が形作っただけだ。

傘は最初から最後まで差していなかった。夜宵も持っていない。濡れた髪が渴けば、酷い有り様になるかも知れない。それでも構わなかった。

唐突に。

赤。

「……愛？」

私は動きを止めた。私に引っ張られていた夜宵も、自然と歩みを止める。

駅の時計台は、既に見えない。

首筋に、皮膚が粟立つかのような感覚。否、錯覚だ。

振り返る。

「何だ、暁刻か」

「アカトキ？」

夜宵の声で紡がれた聞き慣れない文字列——恐らくは名前——に、私は首を傾げた。視線の先には、

猫。

黒い毛並み。瞳は赤。称して違和感。深いが、淡い色。喩えるならば朝焼けのような。

暁。

今、自分は真っ青な顔をしている事だろう。

赤。

あの瞳とは違う赤色が、視界にちらちらと映っている。悪意の気配。濃い。乞い。恋い。

程近いそれに、溜め息。

意識が遠退く。

救いは、黒猫に悪意が無い事、その一点のみだった。

暁刻。

ふらふらと目的も無しに歩いていた。だから、夜宵の姿を見つけたのは完全な偶然だった。

名前を呼ばれる。彼女の声は、俺の四肢を緩やかに締め上げる。

黒の毛並みは、熱を集め易い。感覚を切り離す術は、生まれた瞬間から知っていた。

中途半端に濡れたままのアスファルトが、俺の爪を削る。

夜宵の隣には、同じ年頃の少女がいた。髪が長い。強い風に煽られて、奔放に広がっているから若干鬱陶しそうだ。

少女の顔は白かった。元々色白なのかと思ったが、他の部位はそうでもなかったから、血の気が引いているのだと判った。そうしている内に、更に顔色は悪く、最早土気色に近くなっていく。

夜宵が気付く。

同時に、膝が折れた。瞳は、こちらに向けられたままだ。

「愛!？」

焦ったような声。彼女のこういう声を聞くのは初めてかも知れないと思った。誰かを呼ぼうとでもしたのか顔を上げるが、通りには誰もいなかった。

間が悪い。舌打ちが聞こえた。人間臭いなど、そう思う。

木陰を探して、移動させようとしているが、夜宵の細腕ではとてもではないが無理な話だった。

俺はこのままでは何も出来ない。少女——愛というらしい——は未だに意識を保っているから、滅多な事も出来なかった。

人を呼んで来た方が無難だろう。そう判断したと同時に、夜宵から視線が向けられた。頼む、と唇の動きだけで伝えられる。彼女にだけ判る程度に微かに、首を縦に振った。

愛。愛。脳裏で名前を反芻する。そうだ、桜月愛だ。名前を思い出す。何度か、夜宵から話を聞いていた。

視界が低い。大概の場合にこの姿をしているので、既に慣れていた。

ちりり、と産毛が焼かれるような感覚。それは桜月愛からの視線だった。先程から一度も、俺から視線を外していないのだ。真っ青な顔で、震える体で。

敵意は感じない。しかしそれは、俺の姿を考える限り明らかに鋭過ぎる、射貫くような眼光だった。ただの仔猫でしかない筈の、俺を見るには。

暁刻。実際に名前を呼ばれた訳ではない。しかし夜宵が心で思った事が、本能的に察せられる。

つい最近得た名前だ。足の下が湿っているのを感じながら、俺は数日前の事を思い出していた。

雨ではなかった。しかし少なくとも、それに限りなく近い天気だった。

暫く何も口にしていなかった事と、近づく雨の気配に弱り、ふらりと道を横切ろうとした所で蹴飛ばされかけた。

つい硬直して見詰め合った、世にも間抜けな遣り取りはその直後に。

少女――その後名前を知った。そう、東雲夜宵だ――は、呆然としていた。当然だろうと思う。兎角面倒な事態になる前にと身を翻そうとしたが、夜宵が我に返る方が早かった。

『待て』

待て。犬猫に言われるようにそう言われて反発しかけ、そういえば今は猫の姿をしているのだったと思い直す。どこを歩いていても誰にも大して気にされないのが、気楽なのだ。

『……何だよ？』

今更誤魔化しても無駄だろう。そう判断して、顔を上げる。

少女は、随分と綺麗な顔立ちをしていた。今までに出会った数少ない人間の中では、一、二を争うかも知れない。俺の基準で言えば、だが。

『申し訳無い、注意力を失っていた。怪我は無いか？』

『……………』

次に呆然としたのは、俺の方だった。

普通の猫は人間の言葉を喋らない。それは知識としてある。俺は、動物の言っている事は大概聞き取れた。

しかし、この反応は何なのだろう。人間は、異常という言葉に蛇蝎の如く嫌うのではなかったのか。別に俺は蛇も蝎も嫌いではない。が、それは関係無いだろう。

この状況を判断するには、俺は圧倒的に経験が不足していた。

『おい？』

『……………無い、けど』

『その割には、具合が悪そうだが』

今度こそ、本気で驚いた。何故、気付いたのか。

夜宵はその時、俺の事を真っ直ぐに見詰めていた。その時は訳が判らなかったが、次の言葉で、俺の瞳の色に興味を持ったのだと判った。

『朝焼けの色か』

心なしか満足そうだ。最早疑問を思い浮かべる事すら億劫になって、俺は少女を見上げた。

『ただの栄養不足だ。放って置けよ』

『ミルクでも買って来ようか』

理解した。この女はただの馬鹿だ。

結論付け、俺は挑発的に――この時、俺は無駄に意固地になっていたのだ――言葉を発した。

『くれるなら血が良いな』

『血？ 吸血猫とかふざけた事を言うのではないだろうな』

『言わねえよ。普通の吸血鬼だ』

『ほう。――ん？』

それには流石に反応した。ああそこまですっ呆けてはいなかったかと、何故だか判らないが安堵する。

『――と、言っても、“発生”したばっかで碌な力も使えねえけど』

肩を竦めるも、それは事実だ。それから、自分の現状を話してどうするのかと、後悔する。後悔した。

結局、言葉が続ける。人間と話すという事が、面白かったのかも知れない。

『一部の魔物ってのは、“発生”して、暫くしてから“覚醒”する。それまでは、半人前以下ってところかな』

正直、それどころの話ではないのだが。実際、少し血を吸わなかっただけで四肢の力を失い、拳句苦手な水の気配にすら眩暈を覚える始末だ。

俺の言葉を、夜宵は、まもの、まもの、と口の中で数回繰り返して咀嚼したようだった。漸く思考が人並みになってきたのかも知れない。

それは、希望でしかなかったと、すぐに判ったが。

『存在証明は可能でも不在証明は不可能だという良い事例だな』

それが実際に存在しても、しなくても。呟くように言う。それが一般的な反応なのかどうか、既に俺には判らない。

次の言葉には、本気で正気を疑いたくなかったが。

『欲しいのか？ 血が』

『……………―――は』

啞然。否、呆然か。どちらにせよ、あの時の俺はかなり間抜けだっただろうと断言出来る。猫の姿で本当に良かった。

瞬き、首を傾げ、脳裏で言葉を反芻する。俺の理解は、夜宵のそれよりもかなり遅かった。

『私も吸血鬼に、なぜという事態は歓迎出来ないがね』

『それは、ない……』

だが、しかし、だからと言って。完全に混乱した頭に浮かぶのは、今の状態で雨に降られれば困った事になるだろうという予測。

あっさりと差し出された手首、その条件のように、落とされた言葉。

『君、名前は？』

無い、と。

あの時自分は答えた。ならばと、彼女に貰ったのが『暁刻』の名だ。

恐らく、俺の瞳を見た瞬間に思い付いたのだろう。名前を問う夜宵の声には、気の所為か、期待が含まれてはいなかったか。

今でも、彼女の行動が平均的なものなのか否か、その判断に自信が持てない。

陽が、俺の体を照らしている。太陽の光の下で暢気に動き回ってられるのは、先日貰った血の力が残っているからだろう。尤も、“覚醒”して仕舞えば陽に灼かれるなどという事もないのだろうが――。

「しかし、魔物に名付けるってなあ……」

思わずぼやく。意味は露程も理解していないに違いない。

そして、自分も。その名を受け入れた意味も、飼い猫に扮して彼女の傍らに居座った意味も、何一つ理解してはいないのだ。

人の気配が近い。既に夜宵達からは見えない。本来の姿——自分の本性は、人間と見分けがつかないのだ——に戻って、誰かを呼んでくれれば良いだろう。そう思って、俺は息を吐き出した。

俺の家は、恐らく平均的に見れば広い部類に入るだろうという程度の大きさだった。生憎、平均的、というものがどんなものなのかを俺は知らないのだが。

親の趣味で、光を多く取り入れられるような間取りになっている。家具も、馬鹿高い訳ではないが品質もセンスも良いものが揃っていた。

そう言えば、親の友人に一人成金趣味の親父がいた事を思い出す。極めて健康的な事だと、そんな感想を持ったのだが。

持っている金を使わないよりは、趣味が悪い方が余程良い。

その程度には、俺は世の中の仕組みというものを理解していた。

少なくとも、その心算だった。

夜宵は、先程家を出て行った。学校も休みで、何の予定も無いのかと珍しく起きて来ないのを放って置いたのだが、友人との約束があったらしい。何故起こしてくれなかったのかと理不尽な文句を言われた。

時々夜宵よりも早く起きていると、至極驚かれる。彼女は俺の事を多分に誤解している。

先程。その言葉を思い浮かべた後で、俺はふと時計を見た。彼女が出て行ってから、既に数時間が経過していた。本を読んでいると、どうにも時間の感覚が狂う。

窓は開けっ放しにしてある。湿っていた風は、既に渴いていた。どうせすぐに、雲が空を覆う事になるだろう。

昼を食べるのを忘れたと、今更気付いた。キッチンに行けば夜宵が用意したものが残っている筈。手を付けていない事が判れば、それが夕飯に回るだろうが。

表情を動かさないまま呆れを露わにする夜宵を思い浮かべて、俺はつい吹き出した。あいつはとても素直だ。

一人で笑っていると、小さな物音が聞こえた。視線を滑らせると、開けっ放しにしていた窓から猫が入り込んでくる。

黒い毛並み。あまり見ない、淡い赤の瞳。

夜宵が猫を飼い始めたのは、つい数日前の事だった。海外にいるこの家の本来の持ち主に、飼っても良いと許可を貰って嬉しそうにしていたから、文句も何も言えず仕舞いだ。昨日などは、我満出来ず葵を呼び出して愚痴り倒した。相手の感想など最初から求めていない。

名前は、暁刻。

彼女の名字と同じ朝焼けの色だと言って、面白がって名付けていた。猫に暁刻という名は似合わないだろうと、何度も諭したのだが。

夜宵が俺の為に使っていた時間の内の幾許かは、確実にこの猫に削られている。

眼の前で暢気に毛繕いなんぞしている暁刻を見て、思わず舌打ちする。学校でなら兎も角、猫相手に本性を隠す必要も無い。

「こんな猫、タマカクロで充分だろ」

呟いてから、独り言を口にした事に気付いてもう一度舌打ち。それが孤独を助長する行為である事を知っている。

尤も、人間が本当の孤独に気付くのは、いつだって他人に囲まれたその瞬間なのだが。

孤独を一一知っているという事は、幸せな事なのかも知れないのだが。

首の皮を持ってぶら下げしてみる。まだ幼い仔猫だ。若干暴れたが、些細な抵抗に過ぎなかった。第一、爪が俺に届いていない。

玄関から音。

なご、と小さく鳴いた猫をぷらぷらと揺らしていると、想像通りの呆れた声が降ってきた。

「……何、してる」

「いや？ 親猫の気分に浸ってみようかと」

抗議するかのように、やや濁った鳴き声。本当に可愛くない猫だ。

阿呆か、と夜宵の唇が動く。短い髪が不自然に纏まっているように見えるのは、出て行く時に雨に降られたからだろう。

どうせ嘘だ。

「放してやれ」

「ふふん、甘いな、夜宵」

「猫に甘いも何も無いのではないか……？」

わざとらしく笑いながらも放してやると、とたとたと夜宵に擦り寄る。

正直に言おう。面白くない。

「お帰り、夜宵」

「ああ、ただいま」

「桜月愛は？」

彼女の友人は一人だけだ。帰ったのか。時々夜宵の作る夕食を食べて行く事もある。

「倒れた」

「は……？」

「救急車で運ばれてな。親御さんに連絡をして、一一幸い、すぐに目覚めたのだが」

「……………」

桜月愛。普通に考えて決して誰も読めないだろうと思える名前の少女とは、夜宵を通して何度も会っている。『悪意だらけの男』と、有り難くない言葉も頂戴しているが。

俺は、あの女の特性を少なからず知っていた。否、特性という程のものでもないのだが。

彼女には、悪意が見えるのだという。赤く世界を覆うのだそう。それは特殊な能力でも何でもなく、危険を察知する能力が常人よりも遥かに優れていて、それが視覚にも影響を及ぼしているというだけの事だ。無条件に人の嘘を見抜く夜宵と同じようなものだろう。

その彼女が、気分を悪くする程にあからさまで大きな悪意を感じたというのか。

「生存本能の賜物かな」

「何の話だ？」

「体調に影響が出るのが、だよ」

「ああ……」

夜宵が眉を寄せた。親友の身を案じているのだろう。だが別に、悪意の鋒先が桜月愛である必要はどこにもない。

どちらにしろ不吉な言葉に俺は溜め息を吐く。一一が、その思考も次の瞬間完全に吹き飛んだ

。

「そうそう——」

「ん？」

何を言い出すのかと思えば。

「明後日の放課後に橘千歳から食事に誘われている。夕飯は用意して置くから、自分で食べてくれ。……今日は食べただろうな？」

食べていない。

違う、そうじゃない。頭の中が完全に混乱するのを、奇妙な程に冷静なもう一人の自分が観察していた。

「——はあっ!？」

昼過ぎには、雨は完全に上がっていた。

近い内に、再び曇る事になるだろう。実際、幾許かの雲が既に流れてきているのだ。

しかし、そんな予測も、俺の心を曇らせるには至らなかった。

数日前から、全く落ち着かない自分を自覚していた。物をどこかに置き忘れる、何も無い所で転びそうになるなど、数えるのが嫌になるくらいあった。

だが、それでも、俺は間違いなく浮かれていた。

実際、今日も、月曜日にやっておくべき課題を学校に置き忘れて、取りに行ってきた帰りだった。何故休日に学校に行かねばならないのかと、普段ならば考えるところだろう。しかし、そうは思わなかった。

俺の家は電車で十分近くかかる。今、俺は駅に向かっている。

学校と駅の間には、東雲さんの――正確に言えば、皇城の、になるのだが――家があるのだ。

彼女は、家にいるだろうか。そう考える。

突然顔を出して、迷惑だとは思われないだろうか。いや、少し顔を出すだけだ。いきなり上がり込むような不躰な男だと思われるのは心外だ。

右手に、口実買った菓子折りを提げて。疑いようもなく、俺は上機嫌だったのだ。

木曜日の会話を思い出す。東雲さんを食事に誘う事に成功した日だ。

偶々半額のクーポンを持っていたから、などと。使い古され過ぎてネタにしかない言い訳だったのだが、東雲さんは信じてくれた。

信じた、というよりも。疑う可能性を知らないだけだろうと思う。彼女はそんなに人付き合いが得意ではない。野生動物を相手にしている気分だった。

こういう場合、一度信じて貰えれば懐かれるのは早い。既に半年近く、時間を掛けて作り上げてきた関係だった。擬似兄の友人だからと、そこだけは皇城に感謝したいところなのだが。

右手の袋が、小さく音を立てる。

雲の流れは、相変わらず早い。空は紅蓮に染まっている。

夕暮れ時。

黄昏。

誰そ彼。

朝焼けの刻限を、古くは彼は誰と呼んだそうだ。明け方。東雲。

頬が、自然と緩むのが判った。

上機嫌だ。そう、今、俺は、最高に気分が良い。

東雲さんに会えるかも知れない。皇城とも顔を合わせるかも知れないが、今会ったとしても普段のような劣等感を抱く事はあり得ないと言い切れる。

そう――。そもそも、自分が一方的に抱いていた敵意だったのだ。現に皇城は、自分に対して良くしてくれている。仲が良いのは、周囲も認める所だ。

擬似兄妹扱いされている片割れが、自分と付き合う事になったとしたら、きっと応援してくれるだろう。

俺は、意味も無く歌い出したくなった。不審者として通報されては堪らないので、流石に控え

ておく。

月は上弦よりやや太った、宵月だ。宵。彼女の名前を見付けて、また嬉しくなる。

薄らとした昇りかけの月。

雲は多い。

暫くすれば満月だ。晴れていれば良いと、そう思った。

今は梅雨だから、可能性は少ないのだが――。それでも、そう思う。希望は、絶望には繋がらない。

希望を持つのは、悪い事ではない。

掠れた色の紫陽花を時々視界に入れながら、道を歩く。もうすぐ皇城の家に着くだろう。自然、右手に力が籠もった。

にゃあ。

「――――！」

猫が鳴いた。

それを判別出来たのは、驚きで止まった呼吸を再開し、硬直した体から力が抜けてからだ。

自分の心臓の音が、周囲にも聞こえるのではないかという錯覚。自分の荒い息が、煩くて堪らなかった。

顔を上げる。今の声は上からだった。

暫く、判らなかつた。僅かな動きを見逃さなかつた俺の眼の良さに、自分で驚いた。

殆ど奇跡だと言っても良い。視線の先で暢気に毛繕いをしているのは、夜の影に紛れる黒猫。

屋根の上。

そう、あれは――、あれは、皇城の家だ。東雲さんの。

「お、どかすなよ……」

脱力して座り込みそうになるのを堪え、そう言うが、別にいつ鳴こうが猫の自由だった。猫は興味を失ったように――いや、元々俺に興味を持っている筈もないのだ――、ふいと顔を背けて家の反対側へ行って仕舞った。

取り敢えず、チャイムだ。

そう考え、更に家に近付こうとする。二階の窓に、影。

「――――え」

瞬間。

浮かれていた俺の頭が、一気に冷えた。背筋が寒い。今は初夏だ。

「皇城……？」

窓の人影は、すぐに視界から消えた。呟いて、自問する。自答。

間違いない。逆光で見え辛かったが、今のは確かに皇城輝羅だった。

しかし、――あんな顔は、見た事がない。喜び、怒り、悲しみ、楽しむ――至極素直に感情を表し、そしてその大概において明るく快活な笑みを浮かべているクラスメイト。

その男の、あれ程までに冷ややかな――ゴミか虫でも眺めているかのような、無感情な瞳は。

最早、寄ろうなどという気は失せた。一刻も早く帰ろうと、家の前を足早に通り過ぎ――瞬間、凍り付く。

寒い。

今は初夏だ。

悪寒。

背筋を駆け上がるもの。皮膚が粟立つ。

俺は――

「――子供」

呼び掛けられたのが己だと、気付くのに数秒。のろのろと振り返る。

暗転。

雨だ。私はそう思った。思った所で大した感慨も湧かなくて、己の無意味さ加減に更に可笑しくなる。

先日は僅かな晴れ間が覗いたが、案の定、今日にはまた雲が空を覆っていた。

陰鬱に、なる訳もない。天候なぞに一々振り回されてはいられない。否、意識せずとも。

梅雨だ。

四季の間にひっそりと横たわる、五番目の季節。大概是、誰も気付かないまま。

天と地を繋いで――そう、そんな無意味な事をして！――、この雨滴は一体何をしようというのだろうか。

体調は頗る良い。夜宵を心配させるという失態を犯して仕舞ったが、少し休めば完全に良くなった。親友殿に迷惑をかけるのは心苦しいが、迷惑だなどと思っていないと、嬉しい台詞も貰えたので良しとする事にする。

ぐるり、と視界を回す。

誰も立っていない。歩いていない。存在しないのは死と同義だと、私はいつからか知っていた。何故か知っている気分になっていた。

足下は、アスファルトではなく土だ。

人がいない、というのは良い。赤が視界から減る。

ならば、と考える。

今、私がここに存在する理由。

木々が雨に打たれて音を立てている。春の花はとうに散った。そう、桜も。

寧ろ、桜は真っ先に散る花だ。散る為に咲く花だ。どの花も散る事を目的にして蕾を開くが、あの花はそれが一際顕著だった。不吉の象徴。

その花の名を、自分は持っている。似合いではないか。

知っている。

名のある花など存在しない。

紫陽花を見遣る。花の生に意味は無いが、この潔さは好ましいと、私はそう思っている。

一切のものには意味も価値も無い。人間の命にも、心にも。

だのにそれを理解しようとせずに足掻く、そんな醜い生き方とは無縁のものだ。醜くなければ美しい訳でも無し、美しいものを好ましいと感じるか否かすら人それぞれだが、私はそれを好ましいと思う。理由付けする。それはただの定義だ。

私は視線を元に戻した。ブランコ、シーソー、滑り台。どれも雨に濡れている。それに郷愁を抱くのはどんな人種だろうかと思像してみる。

傘を回す。そんな事をするのは何年ぶりだろうかと考えて、くつりと笑った。

ぐるり。

張られた布の表面から振り落とされた水滴が辺りに散る。桜よりも余程呆気無い。誰にも迷惑は掛からない。何故ならば私は一人であるからだ。

否、誰かが近くにいたとて気にしないのだろうか。

公園だ。朝の時分、誰の姿も見えない。通学路から外れて、大分歩いた場所にある。元々そん

なに人気の無い公園なのだろう。私も、随分と前に来て以来近付いてもいなかった。

夜宵と、歩いていたのだ。この街の思い出は、常に夜宵と共にある。

思い出の全ては。

人影が少しでもあったならとうの昔に大騒ぎになっていただろうと思う。そうしたら、私はこの場所にいなかった。

空を見上げる。傘越しの空は、相も変わらず濁っている。

降り落ちる雨。澱んだ風、濡れる地面、花、木々。そしてそれ以外のモノ。

嘆息した。

濡れて尚美しいものは、命あるものだけだ。私は心からそう思う。だから、目の前のコレも美しくはないのだろう、なんて。

戯言。

寧ろ、醜いくらいで。

そもそも、私をこの公園まで導いたのも、くっきりと赤い、醜くて醜くて醜い悪意だった。無論、普段ならば気にも留めないだろう。恐らくは今日も駅まで行ったであろう親友殿を悪戯に待たせるなどと。

「あぁー」

思い出す。己の馬鹿さ加減に、叫び出したくなった。叫んでも何の問題も無かったのだが、それでも。

連絡するのを、忘れていた。

休みだと判断して、既に登校しているだろうか。今は何時なのだろうかと考える。

態々己の足を運ぼうと思ったのは、先達ての悪意が気になったからだ。少なくとも、夜宵か、それに近い者に向けられた悪意。

親友殿に害をなす可能性を、見捨ててはおけなかった。

死んだ人間はただの物体だ。だからこれは肉の袋でしかあり得ない。

濡れた醜い塊を見下ろして、今一度溜め息を吐く。面倒な事になりそうだ。面倒は、嫌いだった。

携帯電話を取り出して、時間を確認する。矢張り、とうに始業時刻は過ぎていた。随分と長い時間ここにいたらしい。

メールが一通。親友殿以外の人に教えているのは全てサブアドレスなので、これは夜宵からのものとすぐに判る。

絵文字も何も使われていない、『休みか?』という一文。否、一文以下か。

待たせて仕舞った事を謝罪し、遅刻する意を伝えてから、序でに付け加えておく。

赤色を見付けたんだよ。

送信してから、視線を戻した。赤色。赤色。

血。

酷い死体だ。既に人間としての形を保っているのかすら怪しい。

辛うじて判別出来る限りの骨格や筋肉から、少なくとも、男である事は確かだろう。顔は確認出来ないが、ちらちらと白髪が見える。手先を見る。若々しいという印象は感じられない。それ

とも、死んだらこんなものだろうか。

臓腑の殆どが食い荒らされている。手足の一部にも噛み千切られた痕跡。

「……野犬」

思い付いた解答を口にしてみる。最もありそうではあるが、それと同じ程度には非現実的だった。こんな時世に、人気は少ないとはいえ、こんな街中で？

だが、人の食べ残しという主張よりは、幾許か現実的だろうか。

悪意の説明には、前者よりも後者の方が都合が良い。

己の答えに落第点を付けて、死体から視線を逸らし、学校へと向かう事にした。ここにこれ以上いても意味は無いからだ。今から行けば、二時間目の途中には着くだろう。

そう結論し、歩き始める。公園から暫く歩いた所で、僅かな逡巡の後に携帯を取り出した。

実質的に害は無いが、この季節、本格的な暑さはまだと言っても、腐乱が進むのは大分早いだろう。ボランティアの心算で、ボタンを押す。

救急に連絡しても既に意味は無い。呼ぶのは警察だった。

人垣と塵芥の違いはどこにあるのだろう。俺はぼんやりと、そう考えた。

陸守。

それは、とある町を示す名詞であり、とある神社を示す名詞であり、とある一族を示す名詞でもあった。

一族。この言葉が時代錯誤に感じるのは、その言葉の中に生きるからこそその偏見だろうか。俺はそう考えて、心と眉を寄せた。

物事を考えるには客観性が必要不可欠だ。仮令それが無理だと判っていても。

「流行らないって一な。今時」

呟いて、俺は思わず口許に手を当てた。我ながら、最近独り言が多い。虚しさに気付いて溜め息を吐く。

全ては、あの厄介な従弟の所為だ。

呪われているとしか思えない確率で出会って、結局交流が続いている。人はこれを運命と言うのだったか。

嫌過ぎる。

可愛い女の子ならまだしも、相手は男だ。しかも何故か血が繋がっている。しかも何故か無駄に美形で男前の嫌味野郎だ。おまけにイモウト狂い。即ちシスコンだ。否、兄妹という訳ではないのだが、少なくとも周囲の印象ではそうだろう。

性格は頗る悪い。

子供っぽいから、扱い易いと言って仕舞えない事もないが、性悪で俺様なのには変わりが無い。

悪夢だ。

俺はいい加減嫌になって、諸々の思考の全てを断ち切った。

雨は止まない。雨の下では、人工物の全てはくすんで見える。その辺り、人間というのは無力だなと思わざるを得ないのだが。

雨は嫌いだ。

活発なお年頃なのだ。まだまだ遊んでいたい。実際には家業を手伝う破目に陥っているとしても。

家業。これが、少々風変わりだったりする。

俺の持つ名字は、ある種の立場にいる者達にとってはそこそこに有名なものだった。

陸守の町を拠点とし、異能を用いて魔を狩る役目を担う一族。

その一族自体が有名というのもそうならば、更に有名なのが一族の象徴だった。

《九鬼》。

陸守の一族から、一代に一人生まれ出る存在。九つの鬼を従え、陸守で最も強い力を宿す。産まれた、その瞬間から。ただの問答無用。

『一色』『二極』『三角』『四季』『五行』『六道』『七宝』『八戒』欠番一一人の意志に関係無く、彼等は《九鬼》という存在に従っている。

街は、魔地だ。悪意に引き寄せられる存在というのは多いから、存外に顧客は多かったりする

。

いつだって、人間よりも悪辣なモノはいないのだ。

『……犬です』

鬼の一人、一色が声だけを届けて来る。姿は現さない。

その声に納得して、俺は唇の端を吊り上げた。故意に、ではない。自然とだ。

犬といっても、ただの犬ではない。

魔物。

気配の名残が、そこかしこに残っていた。

眼の前には、野次馬が集まっている。町の中心から少し離れた公園で、男の死体が発見されたらしい。

随分と長い時間、この場所にいた気がした。余計な事を考え出した所為だろう。

漏れ聞こえて来る会話から情報を収集する。第一発見者は少女。一方的に死体があると告げて、電話を切られたらしい。何故そんな事が知られているのか、全く人の耳とは恐ろしい。

この辺りは、元々人通りの少ない場所だ。その少女が見付からなければ、詳しい状況など誰も判らないのではないか。

否、判らなくても良いのか。そう思う。雨に大半の血と痕跡を洗い流されたとはいっても、野犬による事故で済みそうだった。少なくとも、先程視た限りでは。

近々、山狩りにでもなるかも知れない。俺には直接の関係は無いが、陸守の神社と屋敷が山の中にあるから、多少迷惑ではあった。

重要な事は一つ。昨晚ここで暴れた何かがいたという、それだけだ。だからこそ、俺はこうして様子を見に来たのだが。

今現在、気配がどこにあるのかは判らない。誰かの『中』に隠れた可能性も考えた方が良くだろう。

面倒だ。

こんな事ならば昨日不精するのではなかったと、俺はもう一つ、盛大な溜め息を吐き出した。

昨日から引き続き、雨は止まないままだ。

癖の強い髪を持つ友人が、たらたらと不平を垂れ流していたが、残念ながらそんな主張をされても困る。それに、俺の機嫌は天気と関係しない。

今現在、俺は絶好調に上機嫌だった。

無論、雨を好きという人間も、少なからずいるのだろうが。

「橘？ 橘ちゃん？ 気持ち悪いですよ？」

クラスメイトにそんな声を掛けられたが、楽に流す事が出来た。緩む頬を自覚しながら帰り支度をしていると、皇城と眼が合う。

「じゃな、皇城」

「機嫌が良いな？」

やっぱり判るのか。それはそうだろうと、思う。

「ああ、今日東雲さんと食事なんだ」

「知ってるよ。夜は自分で何とかしろってさ」

面倒臭いのだろう、声に苦みが混ざっていた。いつも作って貰っているのだ、今日くらいは我満して貰おう。

そんな事を考えてほくそ笑んでいると、にやりと、皇城は似合わない人の悪そうな笑みを浮かべた。

「ま、精々頑張れよ、橘」

「おう」

なんだ、矢張り応援してくれているのではないか。

ほっとして、一方的な敵意を向けていた相手に心の内で謝罪する。皇城は、こんな感情を向けられていた事なんて知りもしないのだろう。

「前の休みに、寄ろうかとも思ったんだけどな。東雲さん、甘いもの好きだろ？」

「女子は大体そうだよな。――って、休みに？」

「土曜日。宿題忘れて」

きょとん、として皇城が瞬く。確かにこの男の顔はとんでもなく整っていた。時々見せる無防備な表情がまた可愛いと、女子達がよく騒いでいるのを見掛ける。

ああ、知らないのか。

「馬鹿だなあ」

「っせえ。浮かれてたんだ」

今日、これから、失敗しなければ何の問題も無いのだ。

己に言い聞かせる。昔から、ストレスには強い。

「何で来なかったんだよ？」

「へ？ ああ――行く心算だったんだけどなあ。ちょっと予定思い出して」

嘘、だ。どうせ知られる事はある得ない。

人はいつも、些細な嘘と多大なる虚偽で日常を構成している。そして人が一番最初に騙すのは、いつだって己なのだ。

だから俺は、先日の光景を、勘違いで済ませる事にした。

悪意の作り出した世界だったのだと。

東雲さんと出会ったのは、高校一年の半ばだった。

その頃も俺は皇城と同じクラスで、矢張り何でも彼に負けていて、今と同じようにあいつに理不尽な嫉妬心を向けていた。

若い、と――そう思う。現在進行形で。

いつか、このような感情を持つ事も無くなるだろう。

その時が来たら、それが老いたという事なのだろうか。

ならば老いは忌憚すべき事ではない。

美しいものは、いつまでも美しいものだ。その前提が揺らぐ事は、絶対にあり得ないからだ。

例えば、東雲さんのような。

眼の前でパスタを口に運ぶ少女を見遣る。髪は短い。一度理由を訊いてみたら、面倒だからという答えが返って来た。

勿体無いと、少しだけ思う。

綺麗な髪なのだから、伸ばせば良い。

そう言ったら、笑ってくれるだろうか。

「髪」

「うん？」

首を傾げる、その仕種が少しだけ皇城に似ているように思うのは、何年も一緒に過ごしてきたからだろうか。

「伸ばさないの？」

「面倒だ」

予想通りの返答。少しだけ眉を寄せる。

「綺麗な髪なのに」

「君のその感想と、私が髪を伸ばすという行為は繋がらない」

「確かに、その意見には反論しない」

至極真っ当な言葉を返されて、俺はそう言って肩を竦めるしかなくなった。いつか繋げる事が出来るだろうか。

無意味に自分を飾る人種よりも余程好ましい事は、確かなのだが。

東雲さんをちらと盗み見る。好きになったのはいつか、正確な事は覚えていない。気付いたら、眼で追っていた。

そもそも東雲さんは皇城の擬似妹で、その意識が念頭にあったから、敵視している人間のものを横取りしようとする思いが若干でも含まれていなかったとは言い切れないのだ。だが、それは少なくとも切っ掛けの一つでしかなくて。

無論、こんな事は、これから先も言う心算など全く無いのだが。

東雲さんは、整った顔立ちをしている。それこそ、皇城と並んで見劣りしない程度には。だが

、華があるという言葉は合わない。整っているのに、それに気付くのが難しい。だが、人目は惹く。そんな矛盾だらけの少女なのだ。

矛盾。俺から見ると、東雲さんは幾許か超越した所があるように感じられるのだが、こんな場面で人間らしさが浮き彫りにされる。

矛盾は、人間だ。

矛盾しているのが人間だ。

矛盾こそが人間だ。

何とも人間らしい事ではないか。

「ううん、でも、今でも充分だね」

東雲さんが片眉を上げた。何がどのように充分なのか、判別が出来なかつたらしい。

俺は解答を与えなかつた。

彼女は、自分から話題を振る事はしない。俺だから云々という問題ではなく、誰に対してもそうなのだろう。東雲夜宵は、他者との交流に無為な会話を必要としない。

人間という生き物は、兎角自分とは違う存在が嫌いなのだ。

だから、東雲さんの風変わりな口調も、整った容姿も、大人びた仕種も。あるいは、特異な家庭環境や目立つ同居人の存在すらも、容易に悪意の対象となり得る。

ああ、そうか。

俺は思い出して、納得した。もしくは、思い出した心算になって納得の出来る答えを思い出して、安定した。

それに気付いた時、橘千歳は東雲夜宵を守りたいと思ったのだ。

擬似兄の皇城ではなく、自分が、と。そもそも皇城は、彼女を守ろうという意識は極端に薄いようだから。

答えを返さない俺に、東雲さんは興味を失つたらしい。再びパスタを口に運ぶ。彼女がチーズ好きなのだと知れただけでも、十分な収穫だった。

時折、唇の端に付いたチーズを自分の舌で舐め取る。そんないい加減さは、初めて見たかも知れない。

色付いた唇から無理矢理に視線を引き剥がし、俺も自分の頼んだラザニアを食べ始めた。漸く手の付けられたそれは、当たり前だが随分と温もりが逃げた後だった。

会話の無い空間で居心地の悪さを感じないのは、大切な事だ。東雲さんは、俺と自分がこの場所にいるという事実を受け止めて、認めている。

美味しいのだろう。顔は綻んでいる。口数は少ないが、とても素直だとそう思う。恥を忍んで色々な場所を試してみた甲斐があった、と思った。

彼女はとても無防備だ。少し親しくなれば、すぐに判った。だから俺は、実は余裕が無かつたりする。

ちらちらと向けられる男の視線。僅かな優越感と、苛立ち。

再び湧き上がってきそうな焦燥を押し止めて、俺は話題を提供しようかと頭を巡らせる。彼女は会話を必要としないが、その行為自体を楽しんでいる事を知っている。

俺はただ、東雲さんが欲しかった。

時刻は、九時を回っていた。

今時、高校生にもなって、この時間を遅いと思う人間は少ないだろう。私も、特に急ぐでもなく道を歩いていた。

雨は小降りだ。

明日には止んでいるかも知れない。

もう少しすれば、梅雨も明けるだろう。

紫陽花は、今暫くは咲いているだろうか。

早いものだと、そう思う。追い付かない。追い付けない。元より、追い付く心算もない。

空気は凝っている。

送って行くと言主張する橘千歳は、寄る所があるからと先に行かせた。彼は大人しく帰って行ったが、これが一般的な事なのかどうかは判別出来ない。その為の材料が無い。

空気は湿っている。

食べていてくれと言いはしたが、輝羅はどうせ何も口にしていないだろう。そういう男なのだ、あれは。

軽食の材料を買いに行く為に、私は今、夜道を一人で歩いている。

輝羅や愛が知ったら、怒るに違いないだろうと、思った。今現在、私が友人と呼べるのは一一内一名は家族と同じだが一一、この二人のみだ。そして両者、私に対して過保護のきらいがある。

否。皆がそうなのかも知れない。友人に対する態度というのは、こんなものなのだろうか。

何にせよ、私は一般的事象に対する経験というものが少な過ぎるのだ。

冷蔵庫には何があったか、思い浮かべる。幸いな事に、私の頭脳は正常に機能しているようだった。

そういえば、中途半端に玉葱と人参が残っていたような。カレーの材料でも買って行こう。

否、今の時間に、カレーは重いか。明日に回した方が良いでしょう。チーズを入れると美味しいと聞いた。

あまりレパートリーは多くない。

輝羅の両親が海外に行った数年前から、家事全般は私の役割になった。少しでも役に立てたらと思っただけだ。お手伝いを雇うと、あの人達は当初言っていたのだが。

最初は当然、料理は酷いものだった。思い出して苦笑する。

輝羅は文句を言いながら、必ず完食するのだ。今までずっとそうだったし、これからもそうだろう。

逆に、外で食べて来ると言う事は、全くと言って良い程しない。

数日前に、一度出掛けていたようだが。

あの男も大概律儀だ。

嘔吐きでは、あるのだが。

月の光は、雲が遮っている。だから明かりは、外灯と通りに面した家から漏れてくる光が頼りだった。

もう少しすれば、スーパーの看板が見えて来る筈だ。

影が横切った。

気にせず、足を進める。人間というのは、無関心の生き物だ。無関心に、無関心のまま、人を欺く。

周囲に視線を向ける。通行人。数人。

嘘と嘘と嘘に囲われた世界。友人は嘘吐き、同居人も嘘吐き、先程まで一緒に食事をしていた男も嘘吐きだった。

人間とは根本的にそんなものなのかも知れない。

虚構で塗り固めなければ、虚飾で覆い隠さなければ、事実はいつだって人を傷付ける。

心も、体も。

時に誇りすら。

私とて、事実など、ただの一度も口にした事が無い。

本当は、事実なんて誰も認識出来ないし、真実は虚構の一部に過ぎないのだが。

私の分は買わなくて良いだろう。先程の食事は満足のいくものだった。今度愛でも誘おうかと考える。

さて、何を買おうか。看板からの光を認めて、私は考える。

無関心の錯綜。

好きと嫌いが対義語だなんて大嘘を、一体誰が最初に言ったのか。

ふと、何かが引っ掛かった。

「……？」

何かが引っ掛かった事は判っても、何が引っ掛かったのかは判らなかった。思考の端に追い遣っていた雑音を、意識して拾い上げる事にする。何が。そう、何かが。

無関心は、私とて同じ事。だと言うのに、何故その音に気付いて仕舞ったのか。

泣き声。

去年の誕生日に、輝羅から贈られた腕時計を確かめる。九時二十二分。

面倒だ。素直にそう思った。

迷子だろう、子供が一人で泣いていた。一人で。

独りで。

まるで人間のようだ。

あの状況は、流石に危ないだろうかと、想像する。優しい大人とそれ以外の大人、どちらに当たる確率が高いだろうかとも。

私は仕方無く、子供に近付いた。

「迷子か？」

「……ん」

頷く。顔を上げる子供。私は驚いて、身を離れた。

泣きじゃくっていたのだろう、眼の周りが腫れ上がっている。涙と鼻水で、顔が酷い状況になっていた。

「お姉ちゃ」

「寄るな」

私はもう一步後退して、子供の台詞を遮った。

昔からそうだ。昔から、判る。動作。視線。口許。声。癖。

判る。

だから、何故判らないのかが、判らない。

「嘘はいけないな、坊や」

雑音が消えている事に、気付いた。

周囲に視線を走らせる。人工の光。家から漏れてくる。外灯が照らしている。看板の蛍光灯。店。自動販売機。車。夜。

いつの間にか、周囲からは人の影が消え失せていた。

子供に眼を向ける。

否、子供がいた場所に。

いたと思っていた場所に。

その、位置に。

「おや」

姿は消えていた。正確に言えば、子供の姿は消えていた。別の姿。

大きな――そう、絶望的なまでに大きい――犬。否、狼か。矢張り犬か。どちらでも構わない。どちらにせよ、私がすべき行動は一つだった。

走り出す。当然のように、犬も追い掛けて来た。先程まで、買い物をしようと思っていたスーパーの中に逃げ込む。

日本の狼は絶滅したのではなかったのか。

「.....良くない傾向だな」

体当たり一つで、硝子は呆気無く割れた。想像通りの光景に笑いも出ない。

現実逃避をし始めたら、人間は終わりだ。否、私は端から始まっていない。

商品陳列棚の間に隠れる事にする。薙ぎ倒される音。缶。瓶。破壊音。顔を出したら不味いだろう。しかし、こちらから見えないというのは嬉しくない。

店の中にも、人はいなかった。

二十四時間営業だった気がするのだが。

場所を移動する。ちらと見えた。手の先が――否、前足か――、人の頭程ある。あれに噛み付かれたら、いかな私でも死ぬだろうと想像する。

滑稽なヴィジョンに笑う。

人生の中に、死は存在しない。いつの時代も。

成る程、非常識だ。先日から、非常識に遭遇してばかりだ。非常識なんて言葉も、所詮は存在しない定義なのだが。

私は人間を否定している。

個人も、集団も。

犬だったら鼻が良いだろう。包装紙が破られた食品から立ち上る臭気の中でも、私の匂いを正

確に感じ取る筈。

私は一息に駆けて、バックヤードに飛び込んだ。背中に感じた風は気付かなかった事にする。

狭くて入れないのかも知れない。地響き。後ろは見ない。

当然だろうが、道なぞ判らない。だから一発で外に出られたのは、ただの偶然だ。

人影。

眼が、合った。

「……愛」

「やあ、夜宵！ 月が綺麗だったので、お散歩中なんだな！」

雲が空を覆っている。

息は整わない。

音は響かない。

私と愛以外の一切の存在の気配が消えていた。

「偶然だな」

「必然かも」

私は笑った。相手も笑ったのだろう。暗くて、表情は判別し辛い。

「どう、信じる？」

相変わらず、親友は嘔吐きだった。

「……輝羅に殺される」

自分で意図したよりも余程、その眩きは逼迫したものになった。

夜宵ちゃんが傷を負わなくて良かった。そんな事になったら、俺の命は冗談でなく散っていただろう。

友人――だろうか。長髪の少女と出会って、夜宵ちゃんは明らかに安堵していた。

何故、あんな所に。

店の裏口？ 別に、絶対にいてはならないという訳では、ないのだが。憑かれていれば判るだろう。あれは無害だ。

ああ、面倒臭い。

連れ立って帰る背中の方。服が、無残に切り裂かれていた。本人には気付く余裕も無かったのかも知れない。少女が気付いて、己の上着を羽織らせる。

傷は無い。

本気で皮一枚の命だった。肩の力を抜いて、笑う。

周囲に影は無い。

夜の中に人影は無い。

雲。月は相変わらず見えない。

訳の判らない状況で襲われた人間の反応としては、落ち着き過ぎている。それを、驚異の精神力と受け取る事も出来るだろう。

しかし、俺はそう考えていない。

あの少女には、己の中で構成されていて然るべき現実というものが存在しない。現実感が無い。だから、非現実にも動じる割合が少ない。

ただの未熟だ。世界を知らない。

完成されていない人間。

完全なる、ただの子供。

輝羅を思い浮かべる。あいつも子供だ。ただ、性質が悪いのは、それを自覚して、正確に理解して、その上で己の状況を己の意志で選んでいるという事で。

あいつには、成長する意志が無い。

世界を狭いままで終わらせようとしている。

変化を恐れている。

人間として、それは、正常な反応なのかも知れなかったが。

子供は変化する生き物だ。だから変化を拒絶した子供は、ただの未完成だ。

正し過ぎる間違い。

それで平然と生きていけるだけの力を持って生まれた事は、幸いだったのか、否か。

俺の判断すべき事じゃない。

風が流れた。

自然と、笑った。笑って、肩の力を抜いて、対峙する。

「困るなあ」

視線の先には、犬。

野犬。否、――魔犬か。

どちらにせよ、する事は変わらない。

狼に見えない事も、ないのだが。

「あの娘はね。恐あいのが後ろにいるからさ」

「――何者だ」

案外普通に声が耳に届いた事に、俺は驚いた。ぱちりと瞬きをする。眼を細める。名なぞ持ちもしないのだろうと、笑った。

名を持たないという、ただそれだけで、人間にとっては害悪なのだ。

名を持たないという、ただそれだけで、人間にとっては有力なのだ。

名なぞ誰も持たない。

「初めまして。俺は葵。陸守葵。一応、陸守当主の第一子なんだけど」

陸守。

その名前に、明らかに魔犬は反応した。低く唸る。陸守の名は、本当に、ほんの一部の存在には有名なのだ。

あまり、嬉しくはない。

「陸守。陸守。あの、陸守か――」

「ま、陸守つつたら一つしか無さそうだけどな」

魔犬は確かに喋っていたが、口はどこかちぐはぐに動いている感が否めなかった。当たり前だ、犬畜生に人間様の言葉は話せない。

「邪魔をするな！」

「や、そんな事言われてもな……。夜宵ちゃん狙いの男の子でも引っ掛けたのか？ 先走ったな」

この異形は、己が誰を相手にしているかに気付いていない。

気付いたら終わりだ。

気付かなくても同様だが。

「おのれ、おのれ……」

「人の話聞いている？」

ああ、聞いてないな。

ご近所様に騒音で訴えられるかも知れないと考えて、それはないかと思ひ直す。

ここは、この犬の空間だ。

知っていて、飲み込まれたのだから。

そろそろ、あの二人は抜け出したらどうか。

もしかしたらと、想像をしてみる。もしかしたら、先日輝羅が言っていた、虫とやらかも知れない。これだから、輝羅は子供なのだ。

その辺りの事に、興味は無いのだが。

風。

『葵様、夜宵様は離れられました』

「そう。ありがと、六道」

虚空からの声に軽く返して、俺は首を回した。ぱき、と骨が鳴る。運動不足なのかも知れない

。

その声を、魔犬も聞いたのだろう。獣の顔でも、眼が驚愕に見開かれるのが判った。

表情豊かだなんて、冗談にもならない。

「貴様……《九鬼》か！」

まあ、この辺りの魔物ならば、《九鬼》と《九鬼》の使う鬼の名くらいは知っていて当然だろう。妥当な判断だと、俺は笑った。

「さて、な」

笑う。にいと、笑みを見せる。

肯定の笑みの心算だった。

同時に、炎が広がった。時々思う。

コンクリートで包まれた世界というのは、偶に厄介だった。勝手に広がるという事をしてくれないのだ。

「Bye. 一一痛くはしないぜ？」

ちょっと熱いかも知れないが。

炎が伸び上がる。燃え広がる。建物が焼ける。空気が焦げる。図体の割に動きは速いようだから、逃げ場を確実に減らしていく。

轟。

ぱちん、と爆ぜた音。足下の砂利。音。些細なそれは、熱い空気に飲まれて消えた。

飛び掛ってくるのを、髪一重で避ける。無駄な動きは好きではないのだ。輝羅もそうだから、この辺り、確実に血が繋がっているのが判る。

温い。俺はそう思った。己で生み出した炎は、俺に熱を伝え難い。

炎を指先に絡める。愛撫するように口許に持っていく。風。爪。牙。

少女の事を考える。彼女は何を思って生きるのだろう。

人間が真っ先に騙すのは、いつだって己だ。

飛び掛かって来た体軀を、身を振って避けた。腕。否、前足か。追い続けるように伸ばされたそれを足場にして跳び上がる。

炎は背後。異形の全貌が見えた。着地して、更に跳び退る。腕を軽く振って、炎を向ける。

黒い四肢に、炎が纏わり付いた。

「鬱陶しい！」

「……？」

魔犬が暴れ出す。紅蓮の帯の何本かが千切れたが、再び繋がる。逃れられない。違和感。

思わず呟いた。

「犬の丸焼きなんて、美味しくはなさそうだよな」

「礼儀を知らぬ童だ」

「！」

声は一一背後。反応するよりも先、ぎゃん、という獣の悲鳴とともに巨躯が吹き飛んだ。相手は逆に、その勢いを利用して戦線離脱する事にしたりしい。

「あ、こら待て！」

無論、止まる馬鹿はいないだろう。多分この世界のどこにも。

「助かった」

気配だけ漂わせる存在にそう言って、俺はがっくりと肩を落とした。

まんまと逃げられた。

己でも意味の判らぬ、絶望的な呻きを漏らして天を仰ぐ。空は相変わらず曇っていた。全ては変わらずに無責任だ。

月が見えていれば、今頃中天に差し掛かっているのだろう。俺は首を振って、無意味な思考を断ち切った。

十三夜。

「……ああ」

隠れた。

それを認めて、私は嘆息した。今暫く待てば、再び顔を出すだろう。

少し前から、雲は減り始めている。

数日前、服を破って帰って来ると、案の定何も食べずに帰りを待っていたらしい輝羅が絶句し、青褪め、次いで怒り出した。心配をさせたらしい。

流石に反論出来ないかと、その時は大人しく恨み言を聞いていた。

材料を買って来るのを忘れたと、気付いたのはその後だ。

もう良いからお前は出るな、と言われて、完全なる子供扱いに辟易したのもその時。

それ以来、輝羅は私を一人で外出させるのを嫌う。

「小腹が空いたな」

私はそう呟いて、空を見上げる。雨は降りそうになかった。

「輝羅、少しー」

「俺も行く」

出て来るから、という台詞を遮られた。振り返ると、向かいのソファで、輝羅が腕を組んでいた。

膝には分厚い洋書。

「読み終わっていないのだろう？」

「後回しだ」

こうして見ると、確かに顔は整っている。十年来の付き合いだから、知り尽くした性格の方に思考がいくのかも知れなかった。

輝羅の嘘は判り難い。

「コンビニだぞ？ 歩いて五分掛からない」

「判ってるって」

いや、判っていないだろう。

反論を飲み込んだ。心配されているのだと気付く。

己の存在を認められているようで、それが少しだけ擦ったかった。

若干の小銭だけを財布に入れて、それを持って出る。当然のように、輝羅も。

光が射した。

雲が流れたのだと、気付くのに数秒。擬似兄は空を見上げていた。私も見遣る。月。十三夜の月。

そろそろ、梅雨が明ける。最後に一雨来るか、否か。

歩いている道中、会話は少なかった。輝羅の口数は、多くも少なくもない。強いて言えば、相手によってころころと変わる。

私の時は、少ない。私自身が無口だということもあるだろうが、長く一緒にい過ぎて、今更話題も何も無いのかも知れなかった。

治安は悪くない。だから、私が一人で歩いていても、問題は無い。

その筈なのだが。

また、光が消える。蛍光灯。人工物。

自然が減っていく度に、人間の矮小さが浮き彫りになる。思い知らされる。隣人で孤独は埋められないのと同様に。

意味の無い思考だった。いや、違う。意味のある思考など存在しない。

意味が判らないから、生きているのだろう。意味を求めて、探して、叶わぬ夢を見て、叶わぬ夢を見る為に、生きている。

死ぬ理由が無かったから。

私は笑った。

「……夜宵？」

擬似兄の問い掛け。己が高揚しているのが判る。何故か。理由は判らない。意味は判らない。

月ならば知っているのかも知れなかった。

無論戯言なのだが。

答えない私に、輝羅は怒るでもなく、軽く肩を竦めるに止めた。

「機嫌が良いな」

程なくして、コンビニの入口に着いた。中に入る。甘いものが食べたい、と漠然と思った。

そもそも私は、甘いものが好きでも嫌いでもない。

チョコを手取る。迷って、もう一つ。

レジに持って行って精算していると、隣で輝羅が酒を買っていた。呆れたが、何も言わない。気付かない方が悪いのだ。

実は輝羅の美貌の真価とは、こういった場面で発揮されるものなのだろう。

外に出てから視線を向けると、相手はその意味に気付いたらしい。悪戯っぽく笑って、問うて来る。

「お前も飲むか？」

「結構」

持っていた袋を、横から攫われた。勝手に中身を見て、眉を少しだけ上げる。

「珍しい。……甘いもん好きだったか？」

「いや、特には」

私はその時、何も考えていなかった。だから、正直にそう答えた。

月が顔を出す。小さな雲が多いのだろう。判別は、し辛いのだが。

擬似兄の表情がはっきりと見える。

私はその時、何も考えていなかった。だから、輝羅が何故そんなにも満足気な顔をしていたのか、全く判らなかった。

嘘は見付けられなかった。

眩しい。

なご、と鳴いた。猫としての声帯の使い方はこうするのかと学習する。この数日で、大分猫のフリが上手くなってきた自覚がある。

もしも。

あの時、ただの猫と人としての出会いをしていれば、俺は今、こんな状況に無かったのだろうか。

考えても意味はない。

ただ、考えられない。

それ程までに、俺は東雲夜宵という存在の近くにいる事に慣れて仕舞っていた。

気配。

満月が近い。待ち望んだ気配。ふわふわとした感覚。浮かれている己を自覚した。

だから、思考する。

俺はこの先どうするのか、自分の事を何も決められないでいる。中途半端に、微温湯に浸かったままで生きている。

大義名分でもあれば、夜宵の近くにいられるのだろうか。

無くても、良いのかも知れないが。それを欲しがっているのは自分だった。

意味が欲しい。

人間臭い思考だと、己でも思う。己の意味を問うのは、人間のみだ。生まれてすぐに人間と暮らし始めたから、感化されたのかも知れない。

特に、夜宵は。

人間の中でも、一際不安定だった。

あの娘は、どう考えているのだろう。

判らなかつた。

答えが知りたかつた。

答えなぞ存在しない事を知っている。

結局、今まで夜宵に血を貰ったのは最初の一度だけだ。その時に付いた手首の傷は、数分後には元に戻っていた。

血を得れば、その程度の力は使える。

朝日の中で日光浴をしているなんて、普通の猫のようではないか。俺はそう思って、ひっそりと笑った。

夜宵は今頃どこにいるのだろうか。普段の行動パターンから推測する。恐らくキッチンにいる筈だった。朝食を作っているのだ。

皇城輝羅はまだ寝ているだろう。

空を見上げる。雲一つ無かつた。この分では、明日も同じ調子だろう。雨が無いのは、良い。水が無いのは。

呼ばれた。そう感じて、俺は身を起こす。

『暁刻』は、夜宵から貰った俺の名だ。名付け親である夜宵が口にすれば、どこにいようと俺に届く。

その事実を、夜宵は知らないだろう。

尤も、建物二階分、この程度の距離ならば、吸血鬼である俺の聴覚を以ってすれば眩きであっても簡単に聞こえるのだが。

俺はいつも通りに、偶然のような顔をして、キッチンへと向かった。屋根から飛び降りて、開け放してある窓から入り込む。

「良い朝だな」

「お早う」

俺は毎度の事ながら、少しだけ動きを止めた。

毎朝、輝羅を起こす前に、夜宵は俺に食事をさせる。夜宵の作るものは素直に美味しいし、別に血液以外は口にしないという事もないので、それは別に良いのだが。

ペット用の皿に入れるとは何事か。

俺は毎朝そう思って、毎朝言いそびれている。一々本性に戻る程の事でもないのに、こちらの方が楽と言えれば楽なのだが。

この少女は、俺の事をただの犬猫と勘違いしているのかも知れないと思う事が、少なからずある。

違うという事は、判っているのだが。

夜宵が俺を見る眼は、見下ろしていても真っ直ぐだ。本性を見せたのは片手で数えられる程度だが、見上げる形になっても彼女は変わらなかった。

七分の服を着ているので、手首が出ていた。ちらと視線を流す。

軽く笑われた。

「欲しいのか」

「……………」

黙りこくるという反応は、彼女を不快にさせるものではなかったらしい。ちょっと待ってると言い置いて、使い終わった皿をシンクに置く。

彼女は少し前に、服の背中を盛大に破って帰って来た事があった。皇城輝羅は怒っていたし、あれ以来過保護が悪化したような気がするが——いや、実は元々あれくらいだったのかも知れない。何にしろ、彼等との付き合いは長くない——俺も不安に感じている。

犬の臭いだ。あまりにもべったりとこびり付いた。

鼻を衝く。

「夜宵、大丈夫か？」

「何の話だ？」

夜宵はそう言って、首を傾げた。先日の事が無ければ、信じて仕舞いそうな程に普通の反応だった。

表情は変わらない。

嘘を見抜くのが上手い夜宵は、それと同じくらいに嘘を吐くのが上手い。彼女も人間だからだ。

それとも、欠落しているだけか。

本当に判っていないのか、それを検討して仕舞う程。

俺の感覚には、今の所何も引っ掛かって来ない。無力な自分に舌打ちする。幸い、夜宵には気付かれなかったようだ。

彼女は、全ての嘘を見破るという。異常な程の直線で突き刺さって来る視線に、脆い人間は突き崩されて仕舞うのではないか。俺はそう思っている。

夜宵はそれを理解しないだろう。

理解出来ないのだろう。

近くで見ていたから、それが判った。

歪。

そして、人間ではない俺には、彼女の視線はあまりにも小気味の良いもので。

差し出された手首を引っ搔いて、極少量の血を舐める。

甘い。

人間は、多量の血液を口にする事は出来ないそうだ。それは生存本能だろうかと考える。

人は他を己に取り込む事が出来ない。

夜宵は何も言わないし、何も語らない。いつの時でも。しかし、その視線が柔らかいものである事は判る。

矛盾した生き物の矛盾した性質に、だから俺は己の先を決められないままにいる。

雨の匂いは遠い。

窓に寄り掛かって、私は下を眺めている。

教師は数分前に教室から出て行った。教師という職は、驚嘆に値すると私は思う。人は基本的に何も学ばない生き物だからだ。

否、根本的に。

それを知っているのか。

判っているのか。

見落としている人間などいないのだろう。ただ、そこに無いフリをしている、だけで。

現実など。

存在、しないのだが。

風が吹いた。

雲は無い。このまま梅雨明けとなるのかも知れなかった。

雨は、好きでも嫌いでもない。

好悪の対象外だった。

私の場合、対象がそもそも少ない、というのがある。

教室は三階にある。この高さから落ちれば、死ぬ確率は二階から落ちるよりも随分と跳ね上がる。

限界を見るようだった。

奇跡など三秒に一度は起こっている。

否、一度も。

地面はコンクリートだ。少しばかり離れた所に、校門が見える。その周りに、何枚か色の悪い葉が落ちていた。育て方が悪かったのか。

恐らく遅刻だろう、一人の男子生徒が、焦る様子もなく閉めてある校門を開けた。

「あ」

思わず声が上がる。少年の足の下に、落ち葉が滑り込んだ。

その光景の強烈過ぎる違和感に、私は眉を寄せる。眼を閉じる。たった今見たものを、何度も頭の中で再生する。

違和感は消える事なく、寧ろ増すばかりで。

溜め息。

いつから、人間は可笑しな事を可笑しな事と感じられなくなったのか。もしかしたら誕生した時からなのかも知れない。或いはそれこそが、人間である為の定義であるのかも知れなかった。

私は何も知らなかった。何しろ人間であるので。

人間が、自然を破壊しているなどと思い上がるようになったのはいつの時代からか。

傷一つ付けられないにも関わらず。

人間に踏み付けられる自然という、そのものが、存在してはならない程の異端だった。

知らず詰めていた息を吐き出した。

先程の男子生徒は、既に大分こちらへと歩いて来ていた。制服の装飾の色の違いから、三年生である事が判る。

子供は王に限りなく近い。

そうして、こうして、少しずつ、玉座から転落していく。

否応無しに。

風が吹く。校門の前に何枚かあった落ち葉が、流されて少しだけ移動した。人間よりも、余程流され難い性質であるようだ。

私は笑った。

馬鹿みたいだ。そう思った。相変わらず、馬鹿みたいな世界。無論、自分を含めて。

愚かよりも良いか。

愚かでないと、言い切れはしないのだが。

騒。

思考が収束したと同時に一気に現実――少なくとも私達が判り易く『現実』と定義している認識段階へと――引き戻される。雑音が耳に入る。赤色が眼に入る。

次の授業まで、三分。

「夜宵」

半ば無意識に、名を呼んだ。クラスを見る。彼女がいない事に、そこで初めて気が付いた。

四六時中行動を共にしているという訳ではない。だから気付かなかった。

それでも東雲夜宵は、私にとっての唯一だ。桜月愛の全。

彼女の周りに、悪意がある。だから心配だった。悪意。赤色。ただの。

いつも夜宵は嘘を見破って、そのまま放置している。異常なまでに鋭い癖に、妙に鈍感でもある。

鈍感というよりは興味が無いのだろう、と心の中で訂正した。

悪意も持たずに。

それを守っているのが、あの男だ。

窓から離れて、廊下に出る。歩くまでもなく、すぐに見付かる。我が親友殿は、少し離れた場所で、男子生徒と向かい合っていた。

皇城輝羅ではなかった。珍しい光景に瞬く。私には気付いていないらしい、それが単純に不満だった。

相手を見る。同学年、二年生。暫く観察していて、見覚えのある顔だという事に漸く気付いた。残念ながら、付随すべき情報は何も持っていなかった。忘れただけかも知れない。

そもそも、人を覚えるのは苦手だ。顔も、名も。

瞬く。謗りを恐れずに敢えて言うならば、少なくとも頭が悪いという印象は無い。表情の動きから、少しばかり神経質であるというのが伺える。

赤色。

瞬く。

赤色。

「————」

瞬間、何の理由も無く根拠も無く、理解した。あの男が、夜宵を取り巻く濃い悪意の元凶だ。

視界が赤い。

眩暈がした。

悪意。

赤色。

悪意。

赤色。

赤色。

悪意。

赤色。

悪意。

悪意。

悪意。

「アイちゃん？」

「！」

覚醒した。

呼び掛けられて、私は呆然とその場に突っ立っていた事を自覚する。

何分経ったのか、判らなかった。

呼吸をしていたのか。

生きていたのか。

時は。

果たして、動いていたのだったか。

いつから、動き出したのだったか。

二人は既に、視界から消えていた。

「何、してるの？」

声。声を掛けられている以上は、相手がいる筈だった。漸くそこまで思考して、視線を滑らせる。

つ、と頬を汗が伝った。それが気持ち悪くて、制服の袖で拭う。生憎とミニタオルはバッグの中だ。

少女。二年生。見覚えのない顔だが、話し掛けてきたからには知り合いだろう。少なくとも、その可能性の方が知り合いでない可能性よりは高い。

そう、ほんの、少しばかり。

「大丈夫？ 顔、蒼いけど」

「んん？ ヘーキだにゃあ」

「もう授業始まってよ」

「ありゃりゃあん」

私は不意に、彼女がクラスで見る顔である事を思い出した。伝達は、遅い。

否、常に。

本当に、人を覚えるのは苦手だ。顔も、名も、存在も。

恐らくこの遣り取りが終われば再び忘却の淵に投げ込まれるであろう顔を見上げながら――私は若干背が低い――、いつも通りの返答をする。呆れたように笑う少女は、教師に命令されて私に声を掛けて来たのだろうか。それとも、普段から親交のある人間だったか。

どうにも思い出せなかった。

そのクラスメイトに続いて、教室に入る。特に強い関心が向く事もなかった。教師の冗談混じりの叱責。意識が捉えたのは、夜宵の視線。

もしかしたら、先程声を掛けられたのかも知れない。だとしたら、悪い事をした。

眩暈。静かに息を整える。

以前から度々思っていた、事だったが。

我が親友殿は、どうにも、厄介事に好かれ過ぎるのではあるまいか。濃くなる赤色に視界を侵食されながら、そんな事を考える。

赤色。

今日は満月だ。ちらと窓の外を見遣り、この分ならば綺麗に見えるだろうと、そう思って私は微笑んだ。

それがどんな種類のものだったかは、判別出来なかったのだが。

どこまでも、呆れるくらいに曖昧な世界。

それはいっそ呆気無いくらい簡単に晴れ渡った天気の時為かも知れないし、最早麻痺し始めている痛覚への刺激の時為かも知れなかった。それとも、単に気分の問題かも知れない。

そんな、益体も無い事を考えて仕舞う程度には、俺は現実感というものを失っていた。

胸か。頭か。手足か。恐らくは、どこか、などという限定も無いのではないか。

痛み。鈍い。そこまで考えて、ああこれが痛みだったのかと、俺は思い出す。ただ只管に、熱っぽくてだるかった。

「じゃな、橘」

「おう」

いつも通りに挨拶を交わす。声を掛けて来た男が、ぱちりと瞬いた。

「何だよお千歳ちゃん。機嫌良いじゃん？」

「そう、かもな」

「ああ」

そこでのやりと、意味深に笑われて、俺はつい片眼を眇めた。

「ふうん？ 成る程なあ。東雲夜宵とうまくいってる訳かあ？」

「別に、付き合うとかじゃ、まだ全然ねえけど」

「『まだ』って事は、見込みはあるんだな？ この裏切り者め！」

「悔しかったらお前も彼女作れよ、青少年」

殊更嫌味に言ってやると、相手は顔を歪めて見せた。けれど笑っている。知っている。所詮本気ではない。

「ま、良いんじゃない？ 東雲夜宵なんてこっええ女好きになんの橘くらいだろうしなあ。お前もゆっくり出来て安心？」

まさか。俺はそう思いつつも、肯定しているように思われるよう、肩を竦めるだけに止めた。案の定、相手は素直に受け取ったようだ。

顔は良いんだけどなあ、顔は。おっと、こんな事言ってたら皇城に怒られるかなあ。――ああ、悪い悪い、今行く。

残りの殆どは独り言で、最後は教室の入口付近からの呼び掛けに軽く手を振りながらの台詞だ。そして俺とちらと視線を合わせてから、入口へと向かって行く。今のは何らかの合図の心算だったのかも知れない。生憎、意味は判らなかった。

緩やかに、息を吐き出す。

痛みが消えるという感覚が、最早俺には判らなくなっている。

会話に区切りが付くと、教室の風景は一気に俺から遠退いた。皇城を探してみるが、既になくなっている。帰ったのだろうと思った。

六限終了の鐘が鳴って、暫く経っている。

とうに、学校は終わっていた。

退廃は終わっている。

退屈は終わっている。

そんな事は勘違いで、――それらは一生続くものだ。俺の認識限界の最後の最後まで、付き纏うものだ。

永遠なんて安っぽいものを、俺は信用しない。

否、恐らくは誰も。

誓うならば何にすれば良いだろう。

何を誓えば良いのだろう。

誓いなど、必要だったか。

誓約は要らなくても、契約なら要るか。

判らなかつた。

思考が迷走している事を、自覚する。痛みの所為かも知れない。熱の所為かも知れない。

そもそも、熱など出ていたか？

騒。

耳を素通りしていく雑音。ノイズはノイズのままだ。ただ、それだけだ。それだけでしかあり得ない。

「また明日」

「ああ」

笑む。俺は今、気分が昂ぶっている。何故なのか、理由は判らなかつた。

今日、これからまた、東雲さんに会うのだと言ったら、皇城は何と言うのだろうか。

手に入れると。

貰うと。

あのお人好しの男は、驚いたような顔をして、それから祝福をしてくれるのだろう。俺はそう思った。

俺はただ、東雲さんが欲しかった。

予習の為の参考書が入った鞆を持ち上げる。重い。いつもよりも軽い気がした。

痛みは消えない。

教室から出る。喧噪。遠い。

無意識の内に、心臓の上辺りに手で触れていた。苦笑して、下ろす。

今、この身の内には、悪魔が住み付いている。

否、悪魔ではない。それは俺が勝手にイメージした、要するに単なる比喻の一種で、本当の所はどんな奴なのか判らない。

姿も。

存在も。

ただ、力だけを知っていた。

懇切丁寧に教えて貰った訳じゃない。ただ、俺がこいつを受け入れた時に、判った。だから俺は、己の判断が間違いではなかつた事を確信した。

悪魔が持ち掛けて来たのは、契約、だった。

欲しいものをくれてやる。だから、――喰わせろ。

そして、陸守に、《九鬼》に対する、隠蓑に。

他にも色々ごちゃごちゃ言っていた気がする。しかしその殆どは俺にとって関係の無い事で、だから大半は聞き流した。

重要な事は、一つだった。

陳腐。

陳腐だ。只管に、笑って仕舞う程に、滑稽なくらいに。

しかし、俺はその誘いに乗った。それは、事実でしかあり得ない。事実以外ではない。事実ではないとは、認めない。

希望が無い訳ではなかったのに。

或いは、あの、一時の錯覚が背中を押したのかも知れない。

黒い猫が。

半分よりも太った、あの日の月が。

よく知るクラスメイトの、藍の色の瞳が。

赤い闇が。

もしかしたら、下らない、ただの焦りであるのかも知れない。

それすらも、悪魔の手の内であるのかも判らない。それでも構わなかった。仮令今を決定しているのが俺でなかったとしても、今を認識しているのは俺を認識している俺という意識に過ぎないからだ。

人間には、それ以上は見えない。

あの日から、俺の命は緩やかに削られている。そう考えて、俺は間違いを訂正する。削られない命などある筈がない。ただ単に、少しばかり早いだけであって。

痛みは消えない。

このままでは、俺は近い内に死ぬだろう。俺はそれを理解している。しかし、それでも構わなかった。

本当は、実際にあの人が手に入らなくても。いや、入らない可能性の方が高いのに。

彼女の為に何かしている自分という姿こそが、欲しいものであったのかも知れない。

夢を、見るだけ。

俺にはその程度の力しかない。

悪魔が俺の中で喚いている。何を言っているのかは判らない。ただ、腹の底から湧き上がる強烈な飢餓感に、理由の無い焦燥を覚えた。

喉が渴く。

元来、俺は現実主義者だ。しかし生憎と、眼が見えていない訳ではなかったらしい。

良かったとは思わない。だが、悪かったとも、思えなかった。

目的を果たせば、こんな器に興味は無くなるだろう。そう考えて、窓を見遣る。日は傾き始めた所だった。

もう少しすれば、東雲さんとの約束の時間になる。

月は昇り始めたばかりだった。今日は満月だ。

真円の月。

深淵。

何の意味も無さそう。そんな事を思った。

夜宵ならば何を思うのだろうか、と思う。いつものように口数少なく、いつものように能弁な瞳で。

或いは下らぬと笑うだろうか。

昇り始めの月は大きい。満月だから尚更。その理由を、俺は知らない。夜宵ならば知っているだろうか。

夜のように饒舌な少女。

昼のように寡黙な少女。

俺に名前を与えた子供。

木々の喧噪は、遠い。

人々の喧噪も。

いくつもの音が合わさって、雑音になる。

ノイズ。

この世界は、不協和音の集まりだ。日々を過ごしていく内に、俺はそんな感想を持つようになった。

ああ、でも、良いかも知れない。そんな醜さは生命の生き汚さを内包しているようで、示しているようで、嫌いではない。

夜宵はまだ帰って来ない。

俺の後ろ。ソファには、皇城輝羅が座っていた。

名前は覚えたが、皇城輝羅が夜宵とどんな関係なのか、まだ把握出来ていない。一緒に住んでいるのは事実だ。だが、兄妹ではないだろう。血の匂いが違うし、何より。

皇城輝羅は、そんな眼で夜宵を見ていない。

夜宵の話からすると、恋人というのも間違いらしい。

いまいち、判らなかつた。それでも良いと思った。

皇城輝羅は、東雲夜宵を守る為に存在している。それはこの上なく、判り易い。

ぱら、とページを捲る音。本を読んでいるのだ。辞典のように分厚い本だった。先程ちらと見てみたが、知らない言語がずらずらと並んでいたのだから二秒で理解を放棄した。

気の所為か、ペースはいつもよりも遅いように感じる。

数秒考えて、気が立っているのだ、と思った。表情は特に変わっていないし別に刺々しい空気を放っている訳でもないが、それでも。

気配を読むのは得意だ。それはもう、本能とでも呼ぶべきもので。

捲る。

沈黙。

ただの沈黙。

夜宵はまだ帰って来ない。

その所為だろうと、思った。かと言って、動き出す様子もない。

自分が動くのが嫌なのか。

意地を張っているのか。

生まれてほんの一箇月しか経っていないが、それでも俺には、判る事があった。

人間という生き物は、実に難儀だ。

テーブルの下には、ミルクが置いてある。白濁色の液体。

何を考えているのか、皇城輝羅は時々俺にこうやってミルクを与える。俺が殆どそれを飲まないのを知っているのに、だ。

朝に夜宵の血を貰ったばかりだから、喉は殆ど渴いていない。

飢えは来ない。

そこまで考えて、俺は首を傾げた。殆ど無意識の仕種だった。

皇城輝羅の、この不機嫌は、確かにこの数十分で悪化しているが、朝から続いているものではないか。

なご、と鳴いた。相手は反応しない。

指先の動きすら、止まっている事に気付いた。

寝ているのかも知れない。

確かめる気には、ならなかった。

彼は極度の低血圧——夜宵がそう言っていた——でもあるので、何か理由があるのか、単に寝不足を引き摺っているだけか判断が難しい。

外を見遣る。

月が浮いている。

日はとうに沈んだだろう。

待ち望んだ満月。

雲一つ無い。

我知らず頬が弛んだ。夜宵を探す序でに散策でもしようかと、外に出る。

皇城輝羅をちらりと見遣る。動き出す気配は無かった。

別に、気にしないだろう。彼は、夜宵以外の全てへの関心が極度に薄いように見える。

周りの人間は、判っていないのかも知れない。

俺には判る。本能的にだ。

月がある。人がいる。人通りは、そんなに多くない。

しかし、まだ寝る時間でもないのだろう。どんな所に、どんな時に多く人が集まるのか、俺はよく理解出来ていない。

道を行く黒猫の姿に、気付く者も気付かない者もいる。赤い瞳は、大概の者が光の反射か錯覚だと思う。

人間は、そうやって常識を作り出している。

“覚醒”前とは言っても、感覚は鋭い。人のそれとは、比べられぬ程度には。

引っ掛かったのは血臭。息を飲む。よく知っている。

夜宵の血の匂いだ。

月を見上げる。

中天には遠い。

逡巡は一瞬だった。地を蹴る力を強める。走り出す。

ぱたん、とどこからか聞こえたのは、本を閉じる時のような音だった。

騒。

風が哭いている。

静寂だ。そして喧噪だ。

満月。

俺は笑った。

「良い月夜だ」

吸血鬼の感覚は、他の異形の者達と比べてもずば抜けて鋭い。人間は、言うに及ばず。

だから、この匂いは誘いだ。俺はそれを理解していた。

いつの間にか、理解出来る程度まで生きていた。

雨の匂いは遠い。濃くて、けれど時々薄い、無責任な酸の匂い。

だん、と地を蹴った。アスファルトに若干の輝が入ったかも知れない。深くは気にしなかった。俺は仔猫の姿を捨てている。

今宵は満月だ。

人通りは少ない。満月の夜程危険なものもないと、本能的に知っているのかも知れなかった。戯れ混じりに考えてみても、どうせ合っているかは判らない。俺は正しく、人間ではないからだ。

人間は脆弱だ。“発生”して暫く経った、いまだ幼い自分よりも、余程。

どうせ、俺達も人間も変わらない生物だった。

理解しているかは、判らないのだが。

地を蹴る。地を蹴る。地を蹴る。誰かが音に驚いて振り返っても、残像すらないだろう。

少量とはいえ、血を貰っていたのが良かった。

地を蹴る。

己が焦っているという自覚があった。

確実に濃くなる匂いに誘われるまま、木々の多い方へと走る。いつの間にかコンクリートの地面は途絶え、道は傾斜に変わっていた。

音が煩い。いや、煩いのは自分の思考だ。混乱している。煩い。自分が何を考えているのか、よく判らなかつた。

だから、音が聞こえないというのに気付いたのは、その少し後。

近い。思ったと同時に、俺は横に飛び退いた。一瞬前まで俺がいた空間を、風が薙いでいく。

否。

風、――ではない。

それが、巨大な犬の前足であると結論するには、あまり時間は掛からなかつた。

犬。巨大だ。先程の動きを見る限り、鈍重ではないだろう。魔犬、とでも呼べば良いのだろうか。一見するとただ大きいだけの普通の犬のように見えるが、細部は若干歪だった。

鱗の生えた尾。不自然に振れた耳。体と大きさの合わない手足。夜は俺の視界を遮りはしなかつた。

ちらと牙を見せる。

ぐる、と唸り声。重なって、人の声。

「随分とあっさり来るのだな」

不快だった。単なる不協和音。口はちぐはぐに動いている。しかし、音は紛れもなくその喉から。

視線を動かす。夜宵本人は――いない。

良い事なのか、悪い事なのか、判らなかつた。

夜宵はまだ生きている。それだけは、判る。あの少女が俺の名付け親だからだ。

月を見上げる。中天は来ない。

「俺の所為で、夜宵を巻き込んだからな」

“覚醒”前の幼体。それが捕食対象になり得る事は、既に心得ている。

それをあの時に知っていれば、自分はどうしたのだろう。

思考は止めた。

「随分とぎりぎりだったじゃねえか？」

「邪魔が入ったのだ、あの男。――おのれ、《九鬼》め」

《九鬼》。

俺は瞬いた。その名は、知っている。何の理由も無く、知っている。

多分、最初から。

「大人しく食われてくれるとは思わん」

「ご理解感謝」

跳ぶ。

再びの、風。速さでは俺の方が勝っているらしいと、判断する。いや、判らない。

何しろ俺は、戦闘というものをした事がない。

どこまで上手くやれるだろうかと、唇を舐める。

着地すると同時、木々がざわめいた。

「……？」

異様。

ただ、異様だった。何が起ころうとしているのか判らない。蠢く。枝が。葉が。根が。急速に伸びる。成長を始める。

騒。

木々が哭いた。

「！」

足下で気配。己の感覚のみを信じて上へと跳んだ。横合いから枝。掻い潜って逃れる。更に伸びる蔦を、同時に上からの奇襲を身を捻って避ける。

葉が踊った。

俺は力任せにそれを散らそうとして、――気付いた。

幻覚。

悪夢のように一斉に襲い来る葉は爪を擦り抜け、腕を擦り抜け、体すら擦り抜けて俺の視界を奪う。魔犬の姿を見失った。同時に俺は視覚を捨てる。

風。

音。

息。

流れ。

殺意。

全てが下から来ていたのに、最後の一つは後ろから。

「―――」

反応は出来なかった。

肩に灼熱。肉を食い千切られたのだと判断するのに数瞬。硬直はその間。そしてそれは致命的なものだと、俺は経験でなく理解している。

誰に言われる事もなく。

兎にも角にもこの場から離れる事が必要だと判断し、樹木を蹴った。軽く撓る、その様子すらも幻覚に思えてくる。

上に跳躍する。滞空時間は長い。空を見上げる。曇っていた。

今にも、泣き出しそうな程に。

体が硬直する。先程まで晴れていたのにとそう考え、降り出そうとしている雨滴に本能的に恐怖する。

吸血鬼にとって、水は弱点だ。“覚醒”後ならば兎も角、こんな幼体の自分がまともに水を被ったら――

「幻覚だよ」

声。

聞いた事のない声だった。そんな事は関係無かった。

同時に、魔犬の悲鳴。すぐ後ろにまで異形が迫っていた事に、その時初めて気が付いた。

「退いてろ、邪魔！」

声は若い男のものだ。誰かは判らない。姿は見えない。幻覚が砕け散る。

木々も、空も、元通りだった。雲まで幻覚だとは気付かなかった。

月を見上げる。中天まで今少し。先程の一撃で、血を失い過ぎたのかも知れない。遠くなる意識を、繋ぎ止める事は出来なかった。

―――夜宵

寒いような気がした。

眠いような気がした。

全てが気の所為のような気がした。

自分が生きている、その事すらも。

否定されているような気がした。

気の所為ではない気が。

今更、否定されたとして、何も思わないのだが。

ただの夢のような気がした。

全てが。

寒い。

眠い。

自分が覚醒しようとしている事に、そこで初めて気が付いた。

「……ん」

寒かった。

眠気は、知らぬ間に消えていた。

何故だ、と考えて、自分の体を見下ろす。失血の為だと、すぐに気付いた。

左の二の腕に、切り裂かれたような傷がある。利き腕でなくて良かったと、そんな事を思った

。

殺意は感じない。殺そうとする意志は感じない。意思も。

興味が無かったのかも知れない。

無関心は、悪意よりも余程優しくて、性質が悪い。

床に落ちた血を指先でなぞる。まだ乾いていない。そこまで確認して、顔を上げた。荒れ果てた小屋のような場所である事に気付く。

外は暗い。

夜だ。

闇には、遠い。

木々のざわめきが煩かった。近くに林のようなものがあるのかも知れない。

二の腕の傷は、既に血が止まっていた。ざっくりとした、深い傷。こんなにあっさり止まるものなのか。

人間の体の事は、よく判らなかった。

自分の事だからだ。

ちゃり、と足下で音。月明かりが窓から差し込んで来る。

今日は満月だったのだと、思い出した。

視線を滑らせる。鎖が見えた。足が重い。私の足の動きを阻害しているのは、これが。

足首に、手錠のようなものが嵌められていた。

ちゃり。引っ張ってみる。鎖の片方は、小屋の壁から出ているパイプに、繋がっていた。

恐らくは配水管が食い出したものだろう。もう、水が通っているとも思えないが。

その程度には、この小屋は荒れている。雑然と。

状況は不明だ。取り敢えず逃げるという選択肢は、鎖の存在で潰されて仕舞った。

携帯を探す事にする。制服のポケットの中には無かったが、近くに転がっている可能性は高い

何故なら相手は、自分に興味を持っていない。

私は橘千歳に誘われた筈だった。放課後、彼に会って以降の記憶が無い。

ぐるりと視界を動かす。見辛い。満月は、幸いだった。

人工の光よりも、余程力強い。

騒。

足首。転がっている男に気付いた。

「橘、千歳か」

顔は見えない。同校の制服だ。二年生。それだけの条件を揃えた赤の他人という可能性も捨て切れないが。

「正解だよん！ さっすが夜宵！」

お早う、よく寝てたね！

木々の喧噪を不寐に切り裂く、素っ頓狂な声。驚いて振り返る。窓の横、光から逃れるような位置に、愛が立っていた。

「……愛」

気付かなかった。

視界に入っていた筈なのに。

そういえば、呼ばれたような気がする。夢現の中で。

愛の、声か。

「生きているのか」

「うん？」

「橘千歳」

溜め息のような言葉に、愛は笑い出した。

「興味があるのかなあ、親友さん！」

「輝羅の友人だ」

「成る程。判り易い理由を有り難う」

生きてるよ。

「大分衰弱しちゃってるんだにゃあ。きゃは、大変！」

いつものようにそう言って、酷くのんびりと立ち上がる。それから私に近寄ると、既に血の止まっている箇所を不満げに撫でて、顔を歪めた。

「死んでても良かったのに」

「愛？」

血で汚れて仕舞っているから、半袖で良かったとは言えなかった。全て買い直しになるだろう

。

剥き出しの傷口に、どこからか取り出した包帯を丁寧に巻きながら、愛は溜め息を吐く。

「ああ、もう。痕が残ったら潰してやろ」

何をだ。

問おうとしたら、指先で制された。つ、と私の唇を指でなぞりながら、愛は頬を膨らませている。

「何故ここに？」

「悪意を込めたんだよう。決まってるじゃないか」

場の空気を読まない、明るい声。いつもそうだ。

互いにそうだ。

「嘘だな」

「うん、嘘」

にこり、頷く表情にすら嘘が見えて、私は困惑した。

どちらが本当か。

実は、一番興味が無いのは私なのかも知れなかった。

それに気付いたのだ。

本当に、今更。

「何が起こったのか、起こっているのか、判り易い説明をして頂けると助かるのだが」

「助ける為と、守る為。力を発揮するのはどっちかな。身の程知らずさん」

鳥に眼を突かれちゃうよ？ 楽しそうに、愛はそう言った。

長い付き合いだ。私には判る。考えるまでもない。

親友は激怒していた。

「安心してくれちゃうと嬉しいんだなこれが。だってカナはいつだって正義の味方だもん！」

「正気か？」

「正気か、だなんて可笑しな質問！」

正気なんて無いよ。

私はゆっくりと、息を吐き出す。それは間違いなく、安堵の溜め息だった。

そう、いつだってこの友人は嘘吐きで。

愛がふらと立ち上がって、橘千歳——らしき少年——を見下ろす。月が顔を照らす。その表情は——笑っていない。時折見せる、あの顔だ。

その横顔に、暫し見惚れた。

「まったく、夜宵をこんな眼に遭わせてくれちゃって……本当に困ったちゃんだなあ」

嘯く彼女の手、鍵が握られていた。くるくると回して弄んでいる。

「どういう意味だ？」

「夜宵は知らなくて良いんだよう。世界が優しいなんて大嘘だからねえ」

桜月愛という少女は、嘘吐きだった。いつも、いつだって。

「ねえねえ、いつだったかのあの仔猫ちゃん、一体何？」

動揺は――していないだろう。

「普通の猫だが――」

「ダウト！ 夜宵は皆と同じくらいに嘔吐きだね！」

溜め息。何に対する溜め息か、自分でも判らなかった。

だって、あいつは、他の誰よりも正直で素直なのだ。

概念が無いだけかも知れない。知らないだけかも知れない。それでも構わなかった。

「愛」

「何かな、親友殿？ 夜宵の為なら、どこへなりとて」

「これを外してくれ」

「アイアイサー！」

ふざけた答えで、愛は敬礼の真似事をした。

少女が手にしているのは手錠の鍵だ。それを、相手も私も判っていた。

「悪意はね、月の方向にあるよ」

秘密を耳打ちするように、愛は私に囁きを落とした。こっそりと、宝物の隠し場所を教える子供のように。

「行ってらっしゃい！」

凡そ邪気と呼ばれるものとは無縁の表情で、親友は笑った。

「真っ赤な世界で、いつだって夜宵だけは鮮やかなんだ」

意味は問わなかった。

やれやれ、世話の焼ける。

俺の周りにいる人間というのは子供ばかりで、だから俺が何故かこんな真似をしなければならなくなるのだ。特に親切的な性格でもない筈なのだが。

どちらも厄介だと、思う。

自覚のある子供は自覚があるからこそ。

自覚のない子供は自覚がないからこそ。

結局、子供というのは勝者なのだと、そう思う。

少しずつ少しずつ、自覚と無自覚を繰り返しながら、人は王位から転落していく。

否応無しに。

「……これって実は、理不尽だったりしないか？」

俺はそう言って、首を傾げた。一瞬後、丁度顔があった位置を、灼熱が焦がす。

「何の話だ」

「人は、望んで王位に就いた訳でもないのに」

魔犬は尾を揺らした。鱗が生えている。特に意味のある装飾でもないのだろう。

「王として生まれて、民草へと戻っていく。丁度、妖の者達が人へと還っていくように。でも残念ながら人はそれに耐えられる程強くないから、だから」

だから。

「人は嘘を吐く」

「……解せんな」

「奇遇だな。実は俺もなんだ」

軽く地を蹴る。残念ながら俺は人だから、さっきの吸血鬼みたいな身体能力は持っていない。

最小限で良い。最小限の動きで、攻撃を避ける。幻覚だと判れば徹底的に相手をしない。

「でも俺は人間で、お前は人間じゃない。これは特に大きな問題でもないんだけど、実は地味に議論の対象になったりする。人間はみみっちいからな」

指先に絡めた炎を放つ。

放たれたそれは同時に加速度的に大きさを増して、魔犬を丸々包み込める程度にまで成長してそのまま相手を飲み込んだ。

ああ、相手が悪い。

怒りの咆哮と共に、炎球が爆散した。こちらにまで火の粉が飛んでくる。自分の支配下にある炎ならば、熱くないのだが。

傷は、負っている。少しずつ。

別に構わない。それは俺の役割ではない。

「例えば、俺もお前も炎を使う。俺が炎を使う事は勿論俺は最初から知ってたが、当然、お前が炎を使う事なんか今知った。さて、ここで問題になってくるのは耐性だな」

魔物と人間。

脆弱なのは後者だ。

「だから、俺にとってあんたは少しばかり厄介な相手になる」

「何が言いたい？」

「詰まり、それが人とそれ以外の存在を区別せざるを得ない事情だって事さ。同じ食物連鎖の中
にいるんだけどな」

先日、やけに炎の効きが悪いと思って首を傾げた理由が、これだったのだ。

街中で炎を出されなかったのは、幸いと言うべきか。

木々に燃え移るのはそれ以上に問題だが、今のところ全ての炎は両者の支配下にある。

空を見上げる。

満月。

眼を正確に貫くように伸びてきた木の枝は無視した。当然のように、俺の体を貫通する。何の
影響もなく。

無駄な動きをすれば、馬鹿を見るだけだ。

「鬼は出さぬのか、《九鬼》！」

答えるのは億劫だった。

もしかしたら、明日辺り山火事騒ぎになっているかも知れない。陸守の名でどうとでもなるだ
ろう。

放った炎は掻き消された。こうも呆気無く散らされると流石に腹が立つものだ。残滓すら傷を
残せないとなると。

思考した瞬間、足下から土が噴き出した。流石に予想外で動きを止める。瞬間間違いに気付い
て飛び退る。何箇所かに傷を負った。炎が掠ったのだろう。自分は人間だ。

そして、相手は人間ではなかった。

陸守の能力者の持つ力は多種多様だ。ただ、異能というその一点のみが継承されているのだ
ろう。

一族の者達皆が、己の力を次代に遺す事が出来ないのだ。

祝いのように。

《九鬼》のみが、正しく代替わりをする。

呪いのように。

俺の操るものは炎だった。それは事象であり、概念でもある。先祖代々続く、体系立てて自ら
の力を理解していくやり方は、まだるっこしくもあったが確実でもあった。

火、というものは、或いは熱であったりする。或いは動く力そのものであったりする。

「俺のは、幻覚じゃない」

ちろ、と熱が揺れた。

四大元素で考えてみれば、風は気体であり、水は液体、土は固体であると解釈される。そして
火は、それらを変化させるものだ。

変化そのものだ。

騒。

木々が哭いた。今度は幻覚ではなく。

それに気付いたのだろう、魔犬が動きを鈍らせる。その一瞬で、充分だった。

重い音。

己の脇腹を、細い小枝が貫通した事に、この人外は気付くだろうか。俺は溜め息を吐き出し、更に木々を動かそうとして、

消えた。

「！」

速い。

後ろに熱が迫るが、対処出来なかった。咄嗟に振り返るも、目の前の炎に息を飲む。人間に一少なくとも俺には一一間に合う速度ではなかった。瞬間。

ざばん。

横合いから、大量の水がぶちまけられた。

「「……………」」

間抜けにも、互いに暫し呆然とする。何の反応も出来なかった。文字通り。

直後、随分と離れた場所にいた幼い吸血鬼の気配が変わる。

見上げる。

「……先に謝っとく」

月は中天。

「嘘だよ。ただの、時間稼ぎ」

己の役割はここまでだと、唐突に理解した。

意識を暫く飛ばしていたらしい。

魔犬の姿は――そして、俺達の間に入った若者の姿も――近くにはなかった。

感覚を広げる。遠い。

血の匂いは、近い。

時間が経っている事に気付いたのは、月の位置が変わっているからだだった。

満月。

欠け無き月は欠け無きが故に、これから欠ける運命を背負っている。そんなものだ。ただ、それだけだ。

何も変わらない。

どうやら、俺が生まれ落ちた世界は、その程度には無責任らしかった。

息を吐き出す。戦闘が、止まった。

意識が広がる。風が流れる。身の内に取り入れて、また吐き出す。片方の気配が消えた。人間。先程割り込んできた、男の方だ。

意識が広がる。音が一瞬暴力的に反響して、思い出したように秩序を取り戻す。それには、数秒と掛からなかった。

瞬く。指先の動きが、鈍い。

中天。

空に月が、浮いている。知っている。月はこの星から逃れられない。これを俺に教えたのは夜宵で、哀れなものだと笑っていた。

月はそこにあるだけだ。人がここにあるのと同じに。俺がいるのと同じに。

愁える夜宵こそが、何かに囚われたがっているようだった。

単なる印象でしか、ないのだが。

安心したかったのかも知れない。

その程度には、夜宵も自己中心的なのだろうと、思った。誰かの為に動ける生き物など、気色が悪い。

我侬だと、思った。

彼女と共に在りたいと望むのは、俺の我侬だ。

それで良いと思った。

衝動。何かは判らなかった。思わず呻いて、しかし膝を落とす事は堪える。

彼女の前で、無様は見せたくない。

意地だ。

「暁刻」

笑う。彼女の声は、俺に届く。

女ののものにしては低いが、やはり男のものではない。柔らかいが温度が低く、優しさを持たない声だ。しかしその声の主が案外優しい事を、俺は知っている。

勝手な印象でしか、ないのだが。

優しさなどと言ったら、夜宵は俺の事を笑うだろうか。

意識が一瞬途切れた。

途切れたのだと、その事実気付いたのは、風の流れが摩り替わったからだ。衝動。内側から、責め立てられている。意味もなく咎められている。焦燥がじりじりと己を焦がす。

気付かれたのかも知れない。

生まれた事に、気付いたのかも知れない。

存在を始めた事に。

力。

命。

存在。

緩やかだが破壊的で、穏やかだが暴力的だった。俺は思わず笑う。残念ながら、俺は狂えない

。

変質。

皮膚が粟立った。己が何であるか、思い出したのかも知れない。喉が渇く。焦燥。衝動。何の意味も無い。

「聞こえているか？」

少しずつ、しかし何の猶予も与えられずに変わる。変わらない。変われない。

所詮俺は俺だ。

血の匂いに、飢えた。

「暁刻」

「夜宵」

俺は少女の名前を呼んだ。呼んでから、驚いた。その名を、初めて呼んだような気がしたからだ。

初めて出会ったかのように。

夜宵を見遣る。血の匂い。喉が渇く。二の腕の傷。既に血は、止まっているようだった。

人間の回復能力は、ここまで高かったか。

傷を受けた体は、求めている。

力を。

己の力が何であるか、俺は知っている。

思い出している。

最初から、思い出していた。

「怪我――」

「互いにな。残念ながら私には、状況が理解出来ていないのだが」

私の親友殿は、悪戯が過ぎて困る。

本当に困ったように言いながら近付いて来る華奢な体から逃げるように、俺は後退った。喉が渇く。

「俺の、所為だな」

「何だ、そうなのか？」

首を傾げる。それから、気にするなど、口にした。

本当に何とも思っていないのだろう。東雲夜宵とはそんな女だった。

それが人間の中でどんな意味を持つのか、俺には理解出来ない。

眼が眩む。

「随分と、具合が悪そうだが」

相も変わらぬ平坦な声に、笑う。何の感情も籠もらない声音。

背は俺の方が高い。覗き込んでくる、その顔には何の表情も浮かんではいない。瞳は黒だ。純度の高い黒というのは実は珍しいものなのだと、俺は最近そう思っている。

頸動脈は、辛うじてワイシャツの下にあった。制服に隠れている。彼女は学校帰りに攫われたのか。

伸ばしそうになる手を、堪えた。

「さっさと逃げろよ、夜宵」

声は、意図せず到低くなった。眩暈。衝撃。頭が、割れそうに痛い。

感覚を切り離せない。

痛みは常に、己のものだ。

魔犬の気配が、近付いて来る。邪魔なものが、いなくなったからだろう。

判らない。

状況が判らない。判っているのは、守るべき、否、守りたいという願望を抱く存在、それだけ

。

利己だ。

構わなかった。

守りたいものが笑う。

「まるで君は、子供だな」

暁刻。

名を呼ぶ、声が好きだ。

眩暈がした。

血の匂い。

渴き。

痛み。

飢え。

本能、だったか。

思い出す。

知っている。知っている。自分は何であるかを知っている。何故なら自分は、最初から思い出している。

それが本能だ。

魔犬の力。命。存在、そのもの。

俺の本能は、それを敵と認識した。

「悪い」

謝った、意味は判らなかつたか。

華奢な体を引き寄せた。

ワイシャツの襟を乱して、口を近付ける。判っている。俺の牙は、丁度獲物を狙う時の猫の爪のように、剥き出しになっている事だろう。

何を以ってして本能などと、定義したのだろう。

歯を突き立てる。溢れ出た血液を、舌で掬った。夜宵は動かない。動けないのかも知れない。判らなかつた。

血を甘く感じるのは、それが己の力になるものだと、知っているからだ。

「……やれやれ」

囁き。少女の体は細い。肌の色は悪い。熱は低い。当たり前だ。彼女は人間だった。

我に返って、身を離す。夜宵は笑った。眠そうにしているのは、単に意識を保つのが困難になっているからだろう。

「傷は、治しておけよ」

お前の分も。

言って、夜宵は俺の腕の中に倒れ込んでくる。

音。気配。風。熱。体。殺意。

俺は、敵と認識したそれに、加減の仕方も判らぬまま渾身の力をぶつけていた。

少女の体が、力を失う。

勝敗は一瞬で決した。

敵ですらない、ただの生存競争だ。

人間と同じように、他の生き物と、同じように。

人間が他の人間を踏み躪るのは、肉食動物が草食動物を屠るのと同じ程度には、自然の摂理に適っている。それと同じ事だった。

見付けた瞬間、手遅れであった事を悟った。獲物はその名を失う。反応すら出来ないままに圧倒的な魔力を叩き付けられて、この体は吹き飛ばされた。

抵抗など不可能だった。術ですらない、稚拙極まりない攻撃だったが、それ以上に“覚醒”して仕舞った吸血鬼の力は強大だった。

最後の力というものが、残っていた事が可笑しかった。山を駆け下りる。

《九鬼》の男もどこぞへ消えた。逃げるならば今しかない。残念ながら、自分は生を放棄する気は更々無いらしい。

吸血鬼が成体になった以上、あの子供も既に不要だった。自分にどうこう出来るのは、あの幼い吸血鬼が“覚醒”するまでの僅か一月の間だけだったのだ。

枝葉が、体を掠った。痛覚は既に遠い。

死に近付いている。思って、また笑う。当然だ。死に向かって生きていない存在は単なる不良品だ。

足下は土からアスファルトに変わっていた。どうせ気付く人間は少ない。そのまま駆け抜けようとし、

気付いた。

「……？」

子供。

最初は、この体が見えてはいないのだろうと、判断した。その程度には、平然としていたのだ。

しかし、その視線は間違いなくこちらを、否、この魔犬を認めている。

動じた様子は、ない。

それどころか、ゆったりと、何の気負いもなく、そうしない事の方が不自然なのだとでもいった調子で、こちらへと近付いてくる。

知らず、恐怖した。

「恐怖？」

下がろうとして、動きを止める。少年の眩きに硬直した形だ。笑いかけてくる。友にでもするように。

その視線は、冷えた。

「知ってるか？ 本当に力のある奴程、どんなものを恐れるべきかを知ってるもんなんだぜ？」

「……………は——」

「その程度の力で、何を恐れるんだよ、お前は？」

月夜だ。

ただでさえ、自分は夜目が利く。視界は殆ど、昼間と変わらない。

その顔は、あの、《九鬼》の男とどこか似ていた。一瞬黒かと思われた瞳の色に違和感を覚えて見直すと、似た別色なのだと判る。

あれは、――藍色？

「おうおう、見事な負けっぷり」

嘲弄。恐怖を忘れて、怒りのままに唸る。

「何者だ！」

子供は瞬く。判り辛い、呆れたようだった。

「『何者』？ 自分がナニかも判らない存在が、そう問うか」

傲慢だな。いっそ感心したように、のんびりと嘯かれる、言葉。

悪意。

「で、頭は？ 冷えたか？」

至極自然に問われた言葉に、先程ぶちまけられた大量の水の原因がこの子供である事を悟る。理由は無い。殆ど直感だった。

「貴様、……………――！」

口を開いた瞬間、体が完全に自由を失う。

何が起きたのか、判らなかった。徐々に重みを増していく体に、一瞬認識が出来ない程に圧倒的な力を掛けられているのだと理解する。

《九鬼》なぞ、比ではない。

本当に何者だ？

『主様』

声。男のものか、女のものか、朦朧とした意識では判別すら出来ない。

『吸血鬼の“覚醒”が済んだ模様です』

「知ってるよ、六道。下がれ」

応の答えを残して、気配が消失した。思考が止まる。

六道。

その名に、呆然とする。少年は、無垢な幼子のようにきょとんと首を傾げて瞬きをした後、思い出したようにこう言った。

「さっきまでお前と戦ってた男は、単なる陸守の異能だよ。お前、今までにも何人か食ってるだろ。あっちは正式な依頼で動いてた」

「な、に……」

言葉に、戦慄する。では、あの男は《九鬼》ではなく、この子供が本物の――？

「聞いてなかったのかよ」

子供は笑った。

嗤う。絞首台へと向かう罪人めいた滑稽さで。

「葵が言わなかったか？ 『嘘だ』って」

晒う。自らの愚かさを知る聖人の顔で。

「九つの鬼を従え、陸守で最も強い力を宿す存在、《九鬼》――だが、実際に使役するのは八体の異形だ。何故だと思おう？」

暢気な声で問われ、隠す気もない殺意の籠もった視線で射竦められて、小刻みに首を振る事しか出来なかった。

『一色』『二極』『三角』『四季』『五行』『六道』『七宝』『八戒』欠番。そう、確かに、《九鬼》が使役するのは八体の鬼だった。

予想していたのだろう、少年が軽やかに笑う。

「知らないだろうな。特別に教えてやる。冥途の土産にすると良い」

ひそりと、悪戯に誘う子供のように。

「九体目の鬼は、《九鬼》だよ。《九鬼》自身だ。……鬼のモノに手を出そうなんざ、軽率だったな。夜宵に手を出さなきゃ、俺は動かないでいてやったのに」

夢へと誘う、魔物のように。

暗転。

迸る自分の悲鳴は、喉ごと圧倒的な暴力の前に潰された。

空を見上げる。

月。

真円。

深淵。

その月を中心にして大きく描かれた虹の円に、俺は眼を細めた。

自然はいつでも無防備に、無関心に、その姿を晒すのだ。

俺達の事など気にも留めず。

留める筈もなく。

その価値も無く。

それを知っている、者達は。

知らぬ者も。

だから俺は、その姿が現れても、露程も意外だとは感じなかった。

男。

黒い髪。肩に掛かる程度の長さのそれは、艶やかに月の光を反射している。赤い眼は鋭く、血が通っているのかと疑いたくなる程白い肌に映える。

人間でいえば二十代前半だろう、背筋が寒くなる程に整った顔立ちの男。

作り物めいた。

作り物めいているが故に、それは人間でない事を確認させる。

俺達は、正面から相對した。

その男が少し前までは十代半ばの少年の姿をしていた事を、俺は知っている。

「暁刻」

名を呼んだ。

呼んだのは、初めてかも知れなかった。

結局、一番素直だったのは人外の者達であったのだろうと、思う。何故ならば彼等は人間ではないからだ。

生きる為に。

彼等にはそもそも虚偽を口にするという概念が薄い。嘘の存在を知らない。他を謀るという考えを思い付かない。

人間程弱くないからだ。

俺達程強くないからだ。

「何、だよ」

暁刻が答える。俺は、この吸血鬼の、それ以外の名を知らない。

他の名は持たぬのであろう、この男は。

幼いこの吸血鬼が今、この場に、この瞬間に現れるであろう事など、とうに知っていた。

下には街。

横には空。

上には月。

何の制約もなく、誓約もなく。

風。

一度“覚醒”すれば、感覚はそれ以前とは比べ物にならない程に鋭くなる。当然、俺の持つ力にも気付いだろう。

予想通りに。

「皇城、輝羅」

「ん？」

軽い返事。口の端に笑みを浮かべると、相手は眉を少しだけ動かした。

無表情。無表情を作っている。

子供だ。

「あんたが、《九鬼》、……なのか？」

「是」

一言で返した。

折角答えてやったというのに、この吸血鬼は微妙な顔で黙り込む。

強大な力の気配を嗅ぎ取っても、実感が湧かないのかも知れなかった。今も、尚。

《九鬼》や陸守、他の術師達に対する認識は寧ろ、生きていく中で身に着けていくべき類のものだ。《九鬼》の名を知っていただけでも及第点。

どこかで知ったか。

或いは、初めから知っていたか。

思い出したのか。

素直な反応に、思わず笑う。笑って、瞬時に、敢えて隠さずにいた全ての力を掻き消した。

こうして仕舞えば、仮令この吸血鬼といえども、俺と常人との間に差を見付ける事は出来なくなる。

驚く暁刻の後ろから、俺はのんびりと声を掛ける。

「暁刻」

吸血鬼は呆然としている。動かない。否、動けないのか。

これはまだ若く、幼い。羽化したとて所詮は子供だ。そう、俺の動きを、全く捉えられないという、その程度には。

暁刻。

それは、夜宵が付けた名前だ。人外に名を与えるというその行為の意味を、彼女が知る筈もなく。

受け入れた、この子供は。

「お前は夜宵を守ろうとするだろうな」

“発生”したばかりの吸血鬼。その彼に、初めて与えられた名。気付かぬ内に契約は成立していた。

赤子に等しい暁刻にしてみれば、夜宵は無条件に守るべき主であり、無心に慕うべき母となるのだろう。

「けど、残念だったな。あいつを守るのは、俺の役目だよ、坊や」

吸血鬼は、ゆっくりと振り返った。彼は反論をしない。俺からすれば、自分の存在がか弱い子供でしかない事を理解したからだろう。

ただ、顔を顰めて。

「あんたとは、仲良くなれそうにない」

思わず笑った。

魔物は嘘を吐かない。

それは力を持っているからだ。

人間は嘘を吐く。

それは力を持っていないからだ。

「奇遇だな？」

己を守る為に、誰かを守る為に。

「俺もそう思う」

だから人間である弱い自分は、今日も変わらずに嘘を吐く。